

---

# **異世界ハーレム彼女の逆襲！**

キタキツネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界ハーレム彼女の逆襲！

### 【NZコード】

N3797Z

### 【作者名】

キタキツネ

### 【あらすじ】

あまりにも凶悪なその目つきのせいで女性に嫌われる主人公、晴樹。

そんな彼が召喚された異世界を救い、その報酬として神に要求したものが

「自分を嫌い、避ける全ての女性が自分を好きになる」といつ『ハーレム機能』であった。

現実世界に帰った主人公は、その凄まじいまでの性能を誇る

『ハーレム機能』のおかげで、我が世の春を謳歌するのだが……。

## 山田春樹のハーレム事情

「人を外見で判断してはいけません」

小学校の頃、誰もが一度は先生に言われた言葉だろう。あの頃、純粋無垢だった俺はこの言葉を信じ、そして裏切られた。

こうして朝の身だしなみを整えるため、鏡の前に立つたびに抉り出される俺のトラウマ。

数少ない（というかほとんど唯一と言つてよい）友人であり幼馴染でもある、美鈴が俺に向けて言つた我が人生最悪の褒め言葉。

『晴樹つてさー、『容疑者A』の写真が一番かっこよく写るよねー!』

……きっと美鈴本人は、必死に俺のいいところを探そうとしていたんだろう。そうに違いない。そう信じたい。生まれつき目つきの悪い俺は、何も知らずに見れば人の一人や二人簡単に殺してそうだ。その怖さは毎朝鏡を見るたびに俺が俺にビビるくらいすごい。

身長体重、共に標準。運動神経だって頭の出来だって顔だって決して悪くない。そんな俺に彼女どころか友人一人出来ないのは、ひとえにこのハンパなく悪い目つきと、それにより幼少時から虐げられてきたせいですっかり歪んでしまった性格のせいなのだ。

あえて断言しよう。

人とは、外見が全てなのである。

だがしかし。二日前から俺の世界は変わった。

ぼっちだった三日前までの俺よ。さようなら！ 俺は、俺だけは

あんたのこと、嫌いじゃなかつたぜ！

こんなにちはりア充な俺。これから張り付くだけよろしくなー。

「さて、今日も俺のハーレムな一日が始まるぜー。」

……異世界、というものを知っているだろうか？

パラレルワールド、平行世界。呼び方は様々だが要はこの世とは違う世界の事である。

そんな世界に俺が呼び出されたのは三日前の昼休み。近づいてくるクリスマスの話題をする隣の席の女子たちに気を利かせ、トイレの個室に立てこもった時のことである。別にこの子たちを避けたわけじゃない。プライベートな予定に聞き耳立てるのはマナー違反だという紳士な俺の判断からである。…………『やつぱり雪が降るイヴに真剣な眼差しで見つめられたら覚悟しちゃうよね！』といつ声に俺のトラウマが刺激されたからでは断じてない。…………けつ。俺に真剣な眼差しで見つめられたら命と直操を失う覚悟をするくせによ。

いやまあ、俺の事はどうでもいい。

本題は、余鈴を聞きトイレのドアを開けたらそこが異世界だったといふことだ。

思わず呆然とする俺に、その世界の神を自認するおつわさんは言った。

「異世界の子よ。貴様に力を『えよう』この世界を救つてくれ」

正直、「やった！」と思つたね。

この世の全ての女性から（大多数の男性からも、なのだが、この際男なんてどうでもいい）嫌われていた俺にはこの世界に絶望しかなかつたからだ。このまま、あと十五年ほど経過したら危うく剣も魔法もない魔物もいないこの現実世界で立派な魔法使いになつてしまつところだつた。

RPGとSLGと凜子攻略はぼっちの嗜み。俺は、過去にやりこんだゲームの知識から思いつく限りのありとあらゆるチート性能を自称神に要求し、その全てを身に付けた。

もちろん、一番大事な『ハーレム機能』もばっちりだ。

じつして万全の準備を整え、お姫様や女戦士や無口ながらも俺に好意を寄せる女魔法使いや女性神官や幼女に化ける俺にだけ懐く魔物などを従えた俺は。

なんと一日で魔王軍を壊滅させてしまったのである。しかも自分の力に依らずに。

最大の功績者は人ではなく、もちろん魔物でもなく、現実世界で流行つていた『風邪』であった。この世界の魔物たちは、偶然風邪気味だった俺のもたらしたウイルスにひとたまりもなく敗れ、次々と勝手に倒れていったのである。

余りの事に呆然とする俺を尻目に、僅かな側近に守られた手負いの魔王を追う王国軍。

やがてその首が獲られ、この世界に平和が戻った時、俺は滂沱の涙を流した。

「一日！ たつたの一曰である。

これでは、ツンデレお姫様が俺に『テレる時間も、普段は勝ち気な女戦士がベッドでは人が変わったように甘えん坊になる時間も、我が家を犠牲にして無口な魔法使いを守り抜いた俺に彼女がそっと寄り添つてくる時間も、貞淑な女神官がその経典に逆らい教会で俺に貞操を捧げる時間も、ネコ耳尻尾付きの魔物つ娘（娘と書いて『こ』と読む）とちよつとHなキャツキヤウフフをする時間も、全くなかつたのだ！」

言葉もなく涙する俺を見て、なにを勘違いしたのか神は言った。

「この世界の平和の為に泣いてくれるとは……。よし。本来ならば在り得ぬことだが特例として認めよう。元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに与えた能力を持つたまま帰ることを許そ。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まっている。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のこと好きで好きでたまらなくなるよじこじしてくれ！」

……ハーレムの王、山田晴樹の朝は早い。

「やつぱり朝のこのひと時は大事ですね。これから出会つ様々な女性とのスムーズな会話のためにもTV、新聞、ネットでの情報収集は欠かせませんよ」

思わずナレーション風に言いつてしまつたが、より良いハーレム生活の為には努力も必要なのだ。……嘘です。本当はもっと深刻な理由があります。

さて。今日も一日がんばるか。

母親の作ってくれた朝食を平らげ、俺はマンションのドアを開ける。

どん。

「きやつ」

外に出た俺に、『食パンを咥え走ってきたかわいい女の子（笑）』  
がぶつかってくる。

「おつと失礼。お怪我はありませんか？　さあ、手を貸すぞ」「は、はい……ぱつ」

顔を赤く染めつつ、そつと手を差し出すその女の子。二日前の俺  
がやれば、手ではなく財布が、「こ、これで許してください……」  
とこう言葉と共に差し出されるといふだ。

名残惜しげなその子と別れ、エレベーターに乗り込む俺。同乗するのは〇〇風お姉さん。

ガタン。

「きやつ」

「おや? 停電のようですね。エレベーターが止まっています

「そ、そんな……暗くて、怖い……」

「だいじょうぶ。俺がついてます。さあ、手を握つてあげましょつ

「あ、ありがとつ……。大きくて、安心する手……ほつ

もう放さないとばかりに力強く握りしめられる手。三田前の俺が  
やれば、エレベーターの管理会社の前に警察に連絡されるところだ。

名残惜しげなそのお姉さんと別れ、学校へ向け歩き出す俺。田の  
前を歩くのはなぜかふらふらしている清楚な女子。

ふりつ。

「きやつ」

「危ない!」

「あ、すいません……。ちょっと貧血気味で……」

「俺が支えなければ車道に出てしまつといろでしたよ。思わず抱き  
しまいましたが、苦しくはありませんか?」

「あ、ありがとつ、ござります、平氣です……。男性に抱きかかえ  
られるのは、生まれて初めてです……ほつ」

なぜか俺の胸にのの字を書き始める女子。三田前の俺がやれば、  
そのか細い指ではなくスタンガンとかそういう防犯アイテムが胸  
に突きつけられるところだ。

名残惜しげなその清楚な女子と別れ、また歩き出す俺。やがて見  
えてきたのは……

「なんだ。美鈴か」

「朝っぱらからなんだとは失礼ね……。はい。昨日の分」

怒りつつ、大きな紙袋を差し出す我が幼馴染、椎葉美鈴。つすい茶色の髪を活動的なショートカットにした、やや釣り目がちの大きな瞳が印象的なこの女とは、幼い頃、何とお医者さん「ひっこ」をしたほどの仲。……例えそれが「俺患者さん。美鈴歯医者さん」という変則的お医者さん「ひっこ」だったとしても、だ。……ぐらついでいた乳歯を「ひっこ」引き抜かれた時の恐怖と痛みは一生モノのトラウマその二だ。

「内訳説明するよ。ラブレター十一通。手作りのお菓子が四つ。同じく手作りのお弁当が二つ。味はひとつはまあまあ。もうひとつは火加減が甘い。あとついでに私宛の『晴樹様に近づくな』という趣旨の脅迫文が一通。殺害予告が三通。」の四つは「のまま警察に持つていくね」

……脅迫文より殺害予告のほうが多いことに、女子の想いの闇の深さを感じる。

いやそんなことより。

「なんで勝手に食つてるんだよ弁当。それ俺宛のだろ?」

「だつて二つも食べられないでしょ?だから適当に私が減らしておいてあげたの。……だいたいさ、最近の晴樹はおかしい。処構わず誰かれ構わずフラグたてまくるの、いい加減にやめなさい。一緒にいる私に迷惑がかかるから」

「そう思つからこそ、こんな早い、あんまり人がいない時間に登校してるんじゃないか」

「それでこれなの? ちょっとあんたおかしいんじゃない? 主に

田つ毛と性格が

「田は関係ないだろ? 田は。泣くぞ?」

「性格のまつは否定しないんだ……」

……そうなのだ。神の力はやはり偉大で、今の俺は歩くフラグ製造機。登校するだけでこの始末だ。……ちなみにこいつ、幼馴染の美鈴にはチート能力が適用されない。俺の願いが『俺を嫌い、そして避ける全ての女性が』であつたためと思われる。なんだかんだいつてコイツ、美鈴は俺を嫌つてはいないようだ。好意があるかどうかはともかく。あと田の事は言つたな。悲しくなるから。

「……だいたい、なんでみんな私をメッセンジャーにするのよ。こんななのどにがいいのか知らないけど、気持ち伝えるなら直接言えばいいのに!」

「誰もがお前みたいな鉄の心を持つていると限らないだろ?」

…『ああ、愛しの晴樹様に気持ちを伝えたい。でも振られたらどうしよう?』ってなるのが乙女心といつものなんじやないか?』

「最近の調査によるとそういう『乙女』は一十年ほど前に絶滅したらしいわよ」

まじかよけやんと保護しようと国一 イリオモテヤマネコより貴重だらうが乙女!

「それに俺だつて別に処構わづフラグ立てるわけじゃねーよ。…つと、お嬢さん、なんで泣いているんだい? ああ風船が木に引っ掛けてしまったんだね。……ほらこれた。もうなくしちゃだめだよ」

「ありがとうおこにちちゃん! みずき、おおきくなつたらおこにちやんのおよめせんになつてあげるね!」

「……そうね」

「俺だつて最初の彼女は理想通りの人を選びたいからな。誰かれ構わざなんてとんでもない。……もしもしそこのお婆ちゃん。そんな大荷物持つたまま歩道を渡るのは危ないですよ。持ちましょ。：へえ、曾孫さんの顔を見に？ お婆ちゃんに似てきつと可愛らしいお嬢さんなんでしょうね」

「ありがとうよ、若いの……。あたしがあと七十歳若ければのう……」

「……理想が高っことはこことだわ」

「だろ？」

「もういいわ。なんだか疲れた……。早く学校行こ。……あ、小鳥ちゃんおはよー」

嫌みのように俺に向かい溜息をついた後、別人のように爽やかな笑顔で挨拶をする美鈴。おい。たまにでいいから俺にもその笑顔を向けるよ。減るもんじゃねーだろ。

「あ、あ、おはようございます。美鈴さんと……山田くん」

小さな声で挨拶を返してくる小柄な少女。前髪を切り揃えたセミロング？ ヒドも言えぱいにのだろうか？ その表情は田を覗すように伸びられた髪のせいによく見えない。

「おはよー小鳥ちゃん。いつも早いねえ」

「そ、そんなことない、です。……あ、先、行きますね」

ペーペー。そんな感じで軽く会釈すると、小走りで行つてしまつ彼女。

「……小動物みたいな子だな。知りあい？」

「ええ。私のクラスメイト」

僕と美鈴は腐れ縁とも言つべきか同じクラスになることが多い。ちなみに今年も例年通り同じクラス、姫神学園高等部1年C組だつたりする。

「……いやまあ、ほら。俺、クラスの女子とあんまり口きかないし……」

「……昨日の調理実習での課題のクッキーを、クラスのほぼ全ての女子から貰つた人の発言とは思えないのだけど?」

「お前くれなかつただろ」

「だから『ほぼ』つて言った」

「じゃあ、きっとあの子もくれなかつたんだよ」

「最後尾に並んでたわよ。小鳥ちゃん。……ちょっと大人しいけど、いい子だよ。小鳥遊小鳥ちゃん」

「いい子かどうかはこの際おいておくとして、その名前の付け方はどうかと思う。親の顔が見たいってこういう時に使う言葉なのか?」字面を見れば韻を踏んでると言えないこともないが、手抜きにも程があると思うぞ小鳥遊両親。俺が市役所の戸籍係だつたら赤ペンで添削して突つ返すところだ。

「ま、名前は本人の責任じゃないからね。……晴樹。長い付き合いに免じて警告しておくけど、ああいう大人しい子ほど思い詰めたらすんごいんだからね。下手に手出しさしないほうがいいわよ」

「了解。……とりあえず早く教室行こうぜ。これ以上フラグ立てたら身が持たないからな」

「……この時、俺はもう少し考えてみるべきだったのだ。

小鳥遊 小鳥。たかなし ことり。

この大人しそうな子が、三日前に変わった俺の人生を、もう一度  
変えることになる。

## 山田春樹のハーレム事情（後書き）

はじめまして。キタキツネと申します。

普段、割とよく人が死ぬようなものばかりを書いているので  
たまにお気楽に、ゆるいものを、と思い勢いで書いてみました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

小鳥遊 小鳥

「……やれやれ。すっかり遅くなつちまつた」放課後。田直の仕事で遅くなつた俺は、人気のない廊下を教室を目指して急ぐ。

『晴樹君との田直』は今のクラスの女子にとつては一種のステータスになるくらいの幸運らしく、黒板を消そうとして手が触れ合づ、ゴミ出しに行って折からの突風でスカートがギリギリまでまくれ上がり、「……みた？」と上田づかいで言われる 黒だつた。 気合入りすぎだらう。山口さん などなど、フラグのオンパレードを積み重ね、ようやく担任の待つ職員室に日誌を提出するところまで行つたのだ。が。

そこで我らが担任、菊池先生（二十七歳。独身。大人の色氣むんむん）と山口さんとの間で女の戦いが勃発。「日誌の内容に關して山田君に確認することがあるわ。個人的に」と俺だけを引きとめようとする菊池先生と、「いつしょにお家に帰るまでが田直です！」とこう遠足と混同しているらしい山口さんによる舌戦はお互い一步も引かず、どういう流れでか「では実技によつて決着をつけましょう」という先生の挑発に「先生が失つた若さと言うものを見せ付けてあげます！」と山口さんが言い返しつつスカートのホックに手をかけたあたりで男性教師による物言いが入り、ようやく俺は解放された。

ありがとう日本史の田中先生。あんたの授業、脱線した雑談と豆知識が多いけど俺は嫌いじゃないよ。もしタイムトラベルとかして過去に行つたら役に立つかもしれないし。

菊池先生と山口さんによる「実技対決」を見てみたい気持ちもちらんあつたが、それよりも俺にとつては夕方六時から再放送されているアニメのほうが重要だった。……『ハーレム機能』によりアルでの女性との関係は大幅に改善されたとはいえ、二次元の女子を愛する気持ちも失わない俺である。今日は青と赤の名シーンだ。見逃せないぜ。

逸る気持ちをそのままに、恐らく無人であろうと予想した教室のドアを勢いよく開ける俺。意外なことにその日に映ったのは、窓から差し込む西日に佇む一人の地味な女子生徒。

「あつ……」

小鳥遊さんだった。

「おひ。 小鳥遊さんか。 もう遅いぞ？ ビーッした？」  
「あ、あの……山田くんを、待つてました……」

〇ヒ。 素晴らしき『ハーレム機能』。この地味めな彼女にもしつかりその力は働いていたと見える。だがしかし。

「本当にすまん。 小鳥遊さん。 今日は俺、どうしても外せない用事があつて……」  
ひとりぼっちは、さびしいからな。俺が見てやらなきゃいけないんだよ。 テレビ。

「あ、あの、わ、私、山田くんが、山田くんのことが前から……」「あれ？ 聞いてた俺の話？ 俺、今から大事な用事が」「彼女の様子を窺う。……あ、だめだこれ。ものすごくテンパって

る。震えるその小さな手はスカートの端をぎゅっと握りしめ、俯いたその顔は過度の緊張に赤くこわばり、多分、俺の声なんて一切届いていない。参ったなあ。

確かにアニメは予約録画している。でもな、リアルタイムで見ながら実況板に書き込むあの一体感がいいんだよ。俺たちぼっちは多くの同志たちと気持ちを一体にして感動を分かち合つことが出来る唯一の時間。それは何より貴重なもので、本物のBBS戦士と自負する俺としてはやはりここは話を切り上げて。

「め、迷惑かとは思つたけど……でも、言わないで後悔するよりはいいかなって！」

そう言って自分を奮い立たせるように勢いよく顔を上げた小鳥遊さん。その拍子にトレードマークのように目にかかるついた長い前髪がさらりと顔の横に流れ、その潤んだ大きな瞳が見える。……あれ？ 意外なほど整つた顔？ というかちょっと幼い感じだけど、この子、前髪上げたらすいじく可愛くね？

「…………わかったよ小鳥遊さん。話を聞くよ」

「山田くん…………ありがとう。で、でも、気持ち落ち着けますから、ちょっとだけ待つてください」

すまん全国のBBS戦士たちよ。俺はちよつと遅れる。が、必ず参戦する。具体的にはオープニング後のCM中には行けると思う。だからほんのちょっとだけ戦線を支えてくれ。今日も勢いTO Pテン入り目指して頑張ろう。

すう～～はあ～～と数回深呼吸してから、やがて落ち着いたのか小鳥遊がついに言つ。

「……私、山田くんのことが、好きです。……良かつたら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願ひします」

……正直、すげえときめいた。外見的にも相当可愛い（しかも普段隠しているところが高ポイント）な小鳥遊さんが、その白い肌をうつすらと赤く染めながら、潤んだ瞳に少しだけ涙を浮かべつつ上目づかいで告白してきたこの光景こそは、俺が何度も夢見て、そして諦めていたものだった。でも。

「…………ごめん。小鳥遊さん。今の俺は、特定の彼女を作る気がないんだ。だから、ごめん」「あっ……」

「あつ

そう言つて謝りつつ、俺は後ろ手に教室のドアに手をかける。そうなのだ。夢の『ハーレム機能』を手に入れた俺にとって、全人類のほぼ半数がそのターゲット。今の俺は選ぶ方の立場。小鳥遊さんが悪いという訳ではない。むしろ今現在においては彼女候補の筆頭と言つてもいい。でも、選択肢は多いに越したことはない。

まだ慌てる時間じゃない。諦めたらそこで試合終了なのだ。

100%理想の彼女を手に入れるその日まで、俺は、戦う。

「……じゃ、俺はこれで。ほんと、ごめんね」

がらつ。……ぬるん。びしゃ。

「ねねねねねねねねーーー。なんじゅうじゅうあああーーー。」

背後の小鳥遊さんに謝罪の意味を込めた眼差しを送りつつ、でも確かな拒絶の意志を見せるために教室のドアを開け廊下に出ようとした俺を、何かぬらぬらしたモノが押し戻した。

「……」「えええええっ！ なんでドア一杯に触手が蠢いてるんだよー？」

思わず尻もちをついた俺は慌てて左右を見回し、ベランダ伝いに隣の教室から脱出するというプランを選択。猛ダッシュで西口差し込む窓へと向く。

「ぐつ！ ま、窓も、開かない、だと……。」

「あ、あの、無駄、だと思ひます。『時空固定』、しちやつてます、から……」

恥ずかしそうな声でそんな厨二っぽい単語を並べるのは、小鳥遊さん。

『時空固定』……異世界に行つた時に無口な魔法使い子から聞いたことがある。簡単に言つと時を止める魔法だとか何とか。……そのまま窓から外を見る。確かにさつきから差し込む西日は一切の角度を変えず、テニス部が打ちあげたボールは空中で止まつてゐる。この寒いのに下半身のみコニフォーム姿の女子のアンダースローともめぐれ上がつたままだ。……あれはE組の武田さんか。いい脚している。やはり女性の価値は胸だけではなく脚にあると言つていひだろ？。ぜひ一度対戦（してじつくり鑑賞）してみたいものである……じゃなく！

「な、ななな、なんだと…？ 魔法！？ 魔法だつて…？」  
「は、はい。ちなみにその子は『触手結界』魔法の『うね子』さん、  
です

やう言つて小鳥遊さんが描きした先は先程の触手ドア。うね子さんとやらが挨拶するやうにうねつねしてくる。その動きに合わせてすこし勢いで俺のUAZ値が削られていぐ。

あまりのことに呆然とする僕。それを不思議そうに見つめる小鳥遊さん。

「あ、あの… 時間がないといつて…」したので氣をきかせてみたのですが…。余計なお世話でしたか？」

あー。そうか。時間が止まつてゐるのならオープニングに間にあつね。よかったです。

「…………いやいやいや。落ちつけ俺。あの、小鳥遊さん？ 魔法だつて？」

「はい。魔法です。山田くん、あいつを見たことなかつたんですか？」

『時空固定』

なんだと…？

「あ、あいつ… って、小鳥遊さん。まさか…」

「はい。私も、山田くんと同じで、『あの世界』に呼ばれて、帰つてきたんです。ただ私は、神様じゃなく魔王さんのまつに呼ばれた側でしたけど……」

「そうか！ 神様に呼ばれた俺がいるんだ。  
ないという保証はない。魔王側が同じことをし

「つ、つまり、小鳥遊さんは向こうの世界で俺に倒された魔王の仲間だったと……。え、も、もしかして魔王を倒された復讐で俺を殺すなど!?」

ちょっとまつてくれ！ 今の俺は戦闘能力皆無だぞ！？ そもそも風邪ウイルスのせいで俺、向こうでも一切戦闘なんかしてないし！ このクラスの魔法使いに襲われたら俺なんか秒殺だぞ！

「へっ？ 復讐？ そんなこと考えていませんよ？」 そもそも魔王さん、生きてますし

「ちよつと待つて。国王軍が魔王の首獲ってきたの見たぞ俺」

「あれは魔王さんが用意した人形、タミーです。……魔王さんは、確かに他の魔物さんたちと違つて死ぬことこそなかつたけど、でも衰弱したのは事実でしたから。……今は国王軍に見つかっていな隠れ家でじつと体力の回復を図つてゐるはずです」

「なんてこつた……」

くそっ！ それならそうと言えよ魔王！ それ知つてればもう少し向こうに滞在して、姫や女戦士や女神官や女魔法使いや女獣つ娘との時間を堪能してきたのに！

「わ、私、ですね。魔王さんの側近として勇者のパーティを迎え撃とうとして、気がついたんです。勇者が、山田くんだったことに.....。春から、入学式からずっと気になつてた山田くんが、私が呼び出された世界にいる.....これって運命なんぢやないかな、って」

俺の動搖をよそに、夢見るように語り始める小鳥遊さん。  
……………そ

の、はにかむような表情と、背後のドアから見え隠れする触手の『ラボレーション』がえらくシユールだ。

「……そして、一日で魔王軍を壊滅させた山田くんが、敵であるはずの私たちのために涙を流すのを見て、確信しました。『ああ。私は山田くんの、敵にすら同情して泣いてくれるこの優しさを好きになつたんだ』って……」

勘違いですそれ。ハーレム計画が駄目になつたと思つて泣いてただけです俺。っていうかどういつも俺の涙を深読みし過ぎだ。もつと考えろ。頭使え。

あとね、その気持ち 자체も多分、自分自身のものじゃないから。それ俺の能力だから。

異世界にいた俺には、と言つか今でもだけど、『ハーレム機能』がついてるからさ、俺の事を見ただけで女の子は無条件で俺の事を好きになっちゃうんだよ。

「だから、思い切つて魔王さんに話したんです。全てを。そうしたら魔王さん、私の気持ちに同情してくれて、この世界に帰してくれたんですね。……向こうで身に付けた、魔法の力を全てそのまま、で

なんてことしてくれやがる魔王！　ってか贋腫だろそれ！　俺は『ハーレム機能』だけだつたぞ！

「……そんな魔王さんの気持ちに応えるためにも、私、勇気出しました。……ずっと隠しているつもりだった気持ちを打ち明けようど。勇気がなくて、三日もかかっちゃつたし、実は昨日、ちょっとズルして調剤した『惚れ薬』入りのクッキーも渡してみたのですけど、効果、なかつたみたいです。……やっぱり勇者様の力はすご

いですね

控え目ながらも可愛いラッピングとは裏腹に、もの凄くどす黒い  
気配を感じるクッキーがあったのはお前のだつたのかよ！ 何となく嫌な予感がして食わなくてよかつたよ！

「だから、今度はもう一度。ちゃんと自分の口で言こまか。……好き、です」

「いや。小鳥遊さん。気持せつけられしこたび、わざわざ言つたよう

に

ピキン！

そんな効果音を出しつつ、教室の床、壁、そして天井までが一瞬で凍りつく。

これは『絶対零度』の魔法！？

別名『エターナルフォースドブリザード』！？ 僕は死ぬ！？

「う、ごめんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくつて……。か、感情が高ぶつたりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃつて……！」

……『テット オア アライブ』ならぬ『テット オア ラブ』か……しゃれにもならねえよそんなの。……俺は必死に、生き残る術を考える。

「小鳥遊、さん」

「は、はい！」

「『』めん。今は彼女作る気になれないって言つのは本当なんだ。それに俺たち出会ったばかりでしょ？」

「あ、あの、一応クラスメイトになつてハケ月ほどたつてます、けど……」

間違えた。

「し、親しくはなつてないって意味ね！……だから、その、と、友達からとこづことではどうだらう？」

「お、お友達、からですか？」

「そう。友達。俺、友達少ないからさ、入づきあいとか苦手なんだ。だから、その、い、いきなり彼女とかだと困るけど、まずは、友達からつてことなら、いいかなあつて」

正確には『少ない』のではなく『いな』のだが、この際そういう細かいことはどうでもいい。……それ認めると悲しくて涙が出てやうしな。

俺の起死回生の一言。俯いてその言葉を瞼みしめるよつて聞いていた小鳥遊さんが、やがて、顔を上げて言つ。

「わかりました。私、がんばります。こつぱー、こつぱーこつぱーくぐして、いつか山田くんに認められるよつてがんばります。よ、よろしく、へいります！」

そう言つて控え目ではあるが、やつと笑つてくれた小鳥遊さんの笑顔は直視できないほど眩しくて、俺は危うく本氣でこの子に惚れてしまつところだった。……が。

「だ、だから。浮氣は、だめ、ですよ。山田へ……うつさん。晴樹へ

ん！…………あ、あの、私の事は『小鳥』って呼んでください、ね

…」

……………いつて俺の夢のハーレム計画が崩壊する」となった。

異世界ハーレム彼女の逆襲によつて。

小鳥遊 小鳥（後書き）

ご意見、感想などを受けたらうれしいです。

## 一級フラグ建築士 VS 隼のフラグフレイカー

異世界。

そこは俺にとって夢のハーレムであった。

豪奢な椅子にふんぞり返った俺は、さて今日はどの娘とナニして遊ぼうかと、周囲に侍るたおやかな女性たちを見回す。俺を見上げるその瞳はうつとりと濡れ、「さあ私を選んで！ そして食べて！」言っているようで、この中から一人を選ぶという作業がまた、楽しくも心苦しい。

迷いに迷いつつやがて一人を選んだ俺が、『そうか。別に一人じゃなくてもいいじゃん。よしこの際あと二、三人……』と他の娘たちも物色し始めたその時、轟音と共に雷が落ち、天から一人の小柄な人物が舞い降りる。その表情は長い前髪に隠れ、見ることが出来ない。

その人物が、小さな口から呪詛の言葉を紡ぎだす。

「晴樹くん……。浮気はダメって言いましたよね……」

ひとつ、ひとつ、ひとつと軽い足音を立てて近づいてくるその人物。彼女が軽く左右に手を振るだけで、俺の命よりも大事なハーレム要員たちが一人、また一人と声もなく消えていく。

「や、やめろ……近づくな……」

やがてその悪魔は俺の前に立ち、その綺麗な前髪をかき上げつつ  
言つのだ。

「浮氣者の晴樹へんこひな、お・し・お・せ・です。……少しこ、痛いですか、ひな」

「小鳥遊いいい！－！」

がばつ！

「正解、正解、正解、正解……。」ミラ。空、静か……。

俺はベッドの上で息を整え、冷や汗を拭う。

三日前、いや、もう四日前か。異世界から『ハーレム機能』を持ち帰り、生まれ変わった気持ちでこの世界を満喫していた俺の前に現れた悪魔、いや魔王の使い。

その名も小鳥遊小鳥。同じく異世界帰りのクラスメイト。

魔王にもらったチート能力をフルに使って俺に迫りくる彼女の存在に、俺は心の底から怯えていたのだろう。まさか初めて会った俺の主観的に、な(その日から夢にまで出てくるとは思わなかつたぜ……。

『……私、山田くんのことが、好きです。……良かつたら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願ひします』

……昨日のことが思い出させられる。

前髪上げたら実は可愛かったというのは『眼鏡を外したら美人』に通じるものがあり、それだけでご飯三杯はイケる。控え目な態度、鈴を転がすような声。正直言つて小鳥遊は俺の好みにぱっちりあつてはいる。だがしかし。

問題は、ふたつ。

その一。……いくら可愛いとはいえ、チート機能を使ってまで迫つてくるのは反則だと思うのだ。小鳥遊君。告白の為に時間を止める魔法使いなんて聞いたこともねえよ。

その二。……お前がチート機能を持っているようだし、俺も『ハーレム機能』を持っているんだ。俺の夢はハーレムを作り、さらにそこから厳選した最高の彼女を見つけること。その崇高な野望を邪魔すんじゃねえ。

「……って、本人を前にしたら言えないしなあ……」

凄まじい威力の『ハーレム機能』を持つこと以外は、今の俺はただの人。

魔王からその凶悪な魔法の全てを受け継いだ小鳥遊を振つて怒らせてしまつたら……そう考えるだけで身震いがする。

「何とか対策考えねえとなあ……」

頭の中で『脳内ハルキ君』——叩から五年までを呼び出し、対策会議を開きつつ登校しようとマンションのドアを開ける俺であった。

「お、おせよひいざいました！」

囁んでる。ましゅってなんだよましゅって。可憐いじやねーか。

ではなく。

俺は田の前に立つ小柄で伏し田がちな女の子に問い合わせる。

「た、小鳥遊！？ なんでここに！？」

「あ、あの……いつしょに登校したいなあ……って思つて……」

「あ、そ、そ、そ、うなんだ。ハハハ光榮だなあ。でもよく俺んち知つてたね？」

「そ、それは、その、こ、この子が調べてくれました……。探索系使い魔の『ミシル』ちやんです」

きじやあああ……

挨拶のつもりなのだろうか？ 小鳥遊の華奢な肩に止まっていた化け物、外見的にはそうだな。ひょこくらいのエイリアンに悪魔の羽を付けたような感じ？ が、まともに聞いたら石化してしまう。そのまま鳴き声を上げる。

朝っぱらからヘイクイなモノ見せるな。SAN値が下がるわ。

そんな俺の動搖をよそに、その『ミシル』ちゃんとやうの顎を撫でる小鳥遊。

「ありがとう。ミシルちゃん。あとでおいしい』はんあげるからね  
きしゃああああああーー！」

多分喜んでこるのだろう。ばつやばつやとその蝙蝠のようない翼をはためかせるミシルちゃんといつ生き物。……にいつにあげる『おいしい』はん』とやらが一体何のかちょっと気になつたが、それ聞くとSAN値だけではなく食欲までなくなりそうなので黙つていた。

といえず。

「そろそろ行こうか小鳥遊。で、そのミシルちゃん戻して。田立つから」

「あっ。は、はい」

小声で何かを呟く小鳥遊。その声が終わると、ぽんつといつ音を立ててミシルちゃんが煙に包まれ消える。便利なもんだ。

「よし。じゃあ行くか。……って、あれ？あの娘は……？」

そう言つて歩き出しかけた俺の視界に、昨日の食パン娘が映る。

反射的に手を挙げて挨拶しようとした俺は妙なことに気がついた。誰かを探すようにきょきょく周囲をうかがう食パン娘の田には、俺が入っていないようなのだ。

やがてちょっとがつかりとした風に肩を落とし、歩き去る食パン娘。

「……なんだ？ おかしいな」

「フラグが立たないなんて。」

「え？ 何か言いましたか？ 晴樹くん？ ……あ、忘れてた」

何かを思い出したように軽く手を振る小鳥遊。その途端、ぱちんという軽い音がして、俺たち……といつかこの一帯を覆っていた透明な膜のようなものが弾ける。

「何だ今のは？ 小鳥遊？」

「えっと、『隠密結界』を解除しました」

「なんでまたそんな物騒な物を？ 誰かに狙われているのか？」

「ゴルゴ三十さんとかに。」

「や。そうじゃなくって……。は、晴樹くんのお家の前で待ってるところ、見られたら恥ずかしいなあ……って思つて……。あ、でも嫌つて意味じゃないですからね」

そういうつむきもじもじしている小鳥遊。その仕草は可愛いけどやつてる」とは意外に大胆というか凶悪。それで今日、新聞届いてなかつたのか。新聞屋すら追い払つたのかよ隠密結界。新聞代返せ小鳥遊。

「ん。……解除したのなら、まあいいや。行こうぜ。エレベーターはまひつちだ」

そう言って今度こそ歩き出した俺。

エレベーターの前で到着を待つのは、昨日のあの「風お姉さん。」にはひとつ、爽やかなさいで更に好感度を上げておくべきだと、俺の中のハーレム魂が告げている。朝から（正確には夢の中

から）続ぐ「タタタ」で引きつり気味の顔を無理に笑顔へと変え、声をかけようとする俺。しかし。

「あ。晴樹くん。エレベーター待たなくとも平氣ですよ。えい  
っ」

ヴィン。

「つおつりーな、なんだ！」

一瞬で、五階にいた俺たちは一階のエントランスへと移動する。

「瞬間移動です。便利、ですよね？」

ほめてほめてと言わんばかりに小鳥遊が俺を見上げる。尻尾とかついてたらぶんぶん振り回しそうな勢い。相変わらず小動物系な彼女。名前は鳥類だけど。……ではなく。

「あ、あのな。小鳥遊。便利なのは認める。認めるけどな、こうぽんぽん魔法を使つたら目立つちまうだろ？ 少しは控えようぜ」「あ……。そ、そうですね。」めんなさい……

途端にしゅんとしてしまう彼女。もともと小柄でうつむきがちなこの娘には、こういう表情もよく似合つ。思わずSに目覚めてしまいそうである。しないけどな。女の子は愛るものであつて苛めるものではない。断じて。……いやでも本人が望むのなら別ではないか？ 小鳥遊つて案外Mそつだし……。

先程逃げ出した『脳内ハルキ君』たちが再び集合し、『SMは有りか否か』という全人類にとつて有意義な会議を開き始めてしまつ

たため、不覚にも俺は、Hレベーターから出でた〇〇風お姉さん  
に気付くのが遅れた。

あつ……。やう思つた時には件の〇〇風お姉さんは、軽くひびき  
田線を送り、小鳥遊とこつしょにいる俺を見てひみつとひびきをつ  
に微笑んだまま歩き去つていくところだった。

……まだ。またフラグを立て揃ねた。

絶対の自信を持つ『ハーレム機能』がうまく働かないことに不審  
を覚え、立ちぬくし考え込む俺の袖をそつと引っ張る弱々しい力。

「何だ小鳥遊。今ちょっと考え方をだな」

「そ、それ……。その……」、小鳥つて呼んでほしいなあ……って

「ああ」

そう言えば昨日、そんなこと言つてたつけ。んー。でもなあ。

「すまん。小鳥遊。やっぱりその頬みはけよつと聞けないかも  
「え……。やっぱり私つて迷惑ですか……」

先程とは比較にならないほど暗い顔。とこづか泣き出す寸前に  
すら見えてる。

「違う違う。どうかかっこーとお前が想像する理由とは逆のベクト  
ルの理由だよ。……いいじやん。小鳥遊つて名前。俺はそっちの方  
がいい」

小鳥も確かに珍しい名前だけど、小鳥遊姓は俺にはつらやましい。  
これは全国の『山田』だけではなく『田中』君『鈴木』さんも同

じよつて思つんぢやないかな？ ありふれた姓をもつ俺たちは『小鳥遊』のような個性ある姓名に憧れるのだ。

「『山田』なんかよりよっぽどこい名前だよ。『小鳥遊』。俺は好きだな」

そう言つて歩き始める俺。いい加減急がないと遅刻しちまうわ。

「まあ、『小鳥遊小鳥』って続くと正直どうかとも思つが……。あれ？ 小鳥遊？ おい。なにしてんだ、早く行こうぜっ！」

返事がないことに違和感を覚えふと振り向くと、ヒントランスで固まっている小鳥遊がいた。その顔は限界まで赤く染まり、今にも倒れそう。

「や、『山田』姓より『小鳥遊』姓がいいつて……。そ、それってもしかして婿入りしたいっていう意思表示、ももももしかして、プロポーズでしょうか……？」

「ちげえよ！ バー口ー！ 早く来い！」

「すげーポジティブだなこいつ！ 高校一年生の身分で求婚なんかするか！」

俺は夢見がちなこの少女の手を強引にとり、引きずるようにして歩き出した。

「……やっぱり遅すぎたか。美鈴、行っちゃったなあ

「いつも美鈴さんと登校してるのですか？」

「んー。何しろ保育園以来、十年に渡る習慣だしな。……誤解するなよ？ 腐れ縁つてやつだからな？」

「あ。はい。わかってます。……いい人ですよね。美鈴さん

「そうかあ？」

思いつきり疑問形で言つてみる。いい人は俺に一生モノのトラウマを植えつけたりしないと思つた？ しかも複数。

「はい……。私、人見知りだからクラスにも馴染めなかつたのですが、美鈴さんは数少ない友人です。いつも優しくしてくれます」

「そういうもんかねえ……。あっ！？」

それに気がついた俺は無意識に飛び出す。目の前にいるのは昨日の清楚な女の子。昨日と同じようにふらふらと車道に出やうになつてている。

昨日と違つるのは車道のほう。そんな彼女に向かい、一台のトラックが速度を上げて迫つてくる。運転手は携帯片手に通話中のように、歩道をよろめく彼女に気がついていない。

『危機的状況にある女の子を救つ……一級フラグ発動だ。

でも待て神様よ！ 確かに俺はハーレムが欲しい！ でもそのために女の子が危険な目に合つようじや本末転倒なんだよ！

「くそったれ！ 間にあえ！…」

俺は限界まで腕を伸ばし、その女の子を引き戻そうとする。しかし、その手はむなしく宙を掴むだけで、彼女の身に届かない。

もう一つ俺自身の体をクッショーンにして彼女を救おうと思い、車道に飛び出す覚悟で足に入れた俺の顔の横を、凄まじい突風が吹き抜けた。

「うーーー！」

そのあまりにも強い風力は、よろける女の子をその威力で歩道側に戻し、俺の目の前で展開される予定だつた悲劇は俺以外のだれにも悟られることがなく回避される。

その風は、俺の後方から吹いていた。

正確には、小鳥遊小鳥、その掌から。

「ま、間にあつて、よかつたあ……」

そう言ってへなへなと座り込む小鳥遊。

「……よくやつた。小鳥遊。風系統の魔法も使えるんだな」

「えつと、実は風系統が一番得意です。……あつちにいた時は、魔物の皆さんたちから、風みたいに早い小鳥つてことで『隼の魔法使い』って呼ばれてたんですよ。えへへ……」

異世界にもいるのかハヤブサ。いらん豆知識をありがとう。

ぺたんと地面に座り込みつつも、ほめられたのがよほどうれしかったのか、にこにこと微笑む小鳥遊。『ご褒美代わりに何となく頭を撫でてやる。

「わあ……」

わあつてなんだわあつて。頭撫でただけだろ。そんな蕩けそうなほど幸せな顔すんな。俺の方までざきどきしちゃうじやねえか。

「……って、しまった！ あの子は無事か！？」

慌てて振り向いた俺の目に映ったのは、風魔法の衝撃で転んでしまった女の子を介抱しているトラックから降りた運ちゃん。……やがて一人の間に何らかの話がまとまつたのか、女の子はトラックの助手席に乗り込み、運ちゃんはハンドルを握る。……恐らく念の為に病院にでも行くのである。

……なるほど。一度あることはサンダーマン。砂男だ。いや意味不明。

明。

俺はいまだに座り込んだまま呆けている小鳥遊を見下ろす。

つまり、こいつだ。こいつが全ての原因だ。

多分、本人にその気はない。なこと思つ。ただ、溢れんばかりの俺への想いが、俺の立てるフラグを結果的に片つ端からへし折つていくのだ。恐らく、無意識に。

「……上等じやねえか……」

めらり。そんな音を立てて俺の中の『ハーレム魂』に火が灯る。

そつちが凄腕のフラグブレイカー……そうだな。異界での二つの名をもじって『隼のフラグブレイカー』とでも呼ばせてもらおうか……だとしても、俺だつて捨てたもんじやない。自称『一級フラグ建築士』である俺と、小鳥遊、お前のその力。

じゅらが上か、白黒つけさせてもらおうか……。

静かに闘志を燃やす俺と、そんな俺が無意識に頭を撫でまわしているせいで、魂が抜けかけてしまっている小鳥遊。……そんな俺たちは時が止まったようにその場に立ちぬくし……。

その日、学校に遅刻した。

## 一級フランク建築士 VS 隼のフランクフレイカー（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています

「……すいません。山田です。遅刻しました」

……『ハーレム機能』不調の理由と小鳥遊の正体に気がついた俺が闘志を燃やしていた時間は結構長かったようで（あとついでに小鳥遊の魂が抜けていた時間も）、結局、俺たち二人はホームルームの時間に間に合わず遅刻してしまった。

不幸中の幸いだつたことは、今日の一時限目がロングホームルームだつたこと。ロングホームルームは各クラスの担任が教壇に立つので、つまり。

「あら。山田君。先生心配したわよお！……あ。小鳥遊さんも遅刻だったのね。まあいいわ。一人とも席について」

……「こうじょう」ことだ。『ハーレム機能』がばつちりかかつてゐる菊池先生（二十七歳。独身）は俺に甘いのでお咎めなしで済んだ。……それはいいけど、菊池先生？ 小鳥遊の扱いがあんまりな気がしますぜ？ ついでに、小鳥遊。遅刻したことに気付かれないって、お前普段どれだけ影が薄いんだよ。

「...」

朝から激しくS A N値が下がる展開が続いたため、席に着くなり溜息が出る俺。そんな俺に小声で話しかけてくるお隣さん。美鈴。席まで近いとか、腐れ縁にも程がある。

「……どうしたのよ。あんたが遅刻つて珍しいじゃない」

ぱつちは田立つことを嫌うため、基本的にルールを守る。少し前までの俺もそうだったし、最近はフラグ乱立防止のため更に早起きだつたから、確かに遅刻は珍しい。

「いやまあ。いろいろあつてな……」

思わず遠い目をしてしまつ。イベント盛りだくさんの朝だつた。

うん。

「ふうん……。それって、小鳥ちゃんに関係あることなの？」

「……何でそう思う？」

「せりやーつしょに遅刻してくればそう思うしょ。それに……」

そう言いつつ、美鈴がちらりと田線を上げる。つられてそちらを見ると、何やら拳動不審な小動物 小鳥遊と田が合つ。慌てて視線を逸らす小鳥遊。

「わっ起きからりずっと晴樹を気にしてるみたい。……何があったのよ

?」「

「何つて言われてもなあ……」

むしろ俺が聞きたい。俺、昨日『友達から』って言つたよなあ…

…?

「昨日も言つたけど、ああいう大人しい子ほど危ないんだからね。手作りチョコに何か混ぜられたり、家の前で待たれたり、あんたに近づく女の子を排除したりとかしかねないんだから。そういう前にちゃんとしておきなさいよ」

先生。うちの幼馴染がチートでピンポイントな千里眼の持ち主です。

あともうそれ全部体験済みです。かなり手遅れです。女つて怖い。お前も小鳥遊も。

「ちやんと……ねえ」

俺はもう一度小鳥遊を見る。

……俺の視線に気がついた小鳥遊が、小さく控え目に、指先を振つていた。

「さあ。今日のロングホームルームは月一回の恒例席替えタイムですよー！」

「いえーい！ とノリのいい何人かの生徒たちが応えた。

何がそんなに楽しいんだお前ら。……いや、楽しいんだろうな。学校生活を満喫しているお前らにとつて席替えは重要なイベントの一つなんだろうよ。俺たちぼっちにとつてはせいぜい「後ろの方がいいな」とか「日当たりいいほうがいいな」くらいしか希望はないけどさ。

……と、先週までの俺ならそう思つたろう。

今は別の意味でどこでもいい。なぜなら俺には無敵の『ハーレム機能』がついている。隣がどんな女子であれ、一瞬でフラグを立てることが可能だからだ。

俺はのんびりと担任の用意した席替え用クジに並ぶクラスメイトたちの最後尾につく。……と思つたら違つた。後ろにちっこいのがいた。小鳥遊だ。

「…………晴樹くんの近くになれますよう」と晴樹くんの近くになれます  
「…………晴樹くんの近くになれますよう」

「…………おこ小鳥遊。田立つからさしあつて俺の名前呪文のよつと連  
呼すんな

怖いわ。

「ひやー！…………あ、でもきっと田立ちませんよ、多分……」「  
「なんでだよ？…………まさかまた隠密結界でも使ってるのか？　人  
前で魔法使うのはやめとけとあれほど」

「違いますよ。…………だって、ほら

そう言つて小鳥遊が指さしたのは女子の一群。何やら大騒ぎして  
いる。

「山田君の鱗を！　お願い神様！」

「やまだー　やまだー　やまだー…………」

「山田晴樹！　山田晴樹の近くを一枚ようじへー。」

「やつまつだつ！　やつまつだつ！　」

「山田君が教卓の真ん前になりますよ。」

「…………」。こうぞ担任特権で

…………。

…………

「あの山田祭り。山田特売日か？」  
「ちょっと君たち怖いんですけど？」あと約一名、生徒じゃない大

何

大

人の女性の声が混じつているよつたな氣もしましたが、俺の勘違いですかね菊池先生？

異様な教室の状況に慄いているつむぎ、くじ引きは俺の番になる。その瞬間、教室は静寂に包まれ、俺の一挙一足にクラスメイト全て（プラス大人気ない大人一名）の視線が集まる。その有様は、まるで年末恒例の異種格闘技トーナメント抽選会場のよう。もちろん俺の立場は大本命選手。俺の引く一枚に、このクラスの女子の思惑が何重にも絡まる。

「クリ。

その雰囲気に呑まれた俺は箱の中から一枚のくじを取り出し、何となくやらなくてはいけないよつたな、そんな義務感に駆られ、そのクジのナンバーを読み上げる。

「や、山田晴樹。十一番」

「つおおおおおおおおおおおおおお……」

「十一番！？」ってことは隣は五番と十七番ね！」「外れたわ！」「五番ありませんかー。五番買いますよー」「納得できません！ やり直しを要求しますー」「やり直し要求多数により再実施はありね……。いっそもう山田君の席は教卓前の指定席に、いつん、この際だから教卓を席にしてしまつのも……」「

うん。もう一度言ひ。お前ら怖い。

俺の隣の席を売るな買'な。ダフ屋は違法行為だ。ちなみに幾ら出す気だ？

あと菊池先生はもう少し自重してください。大人なんだから。

一部女子生徒（プラスどうしようもない大人一名）によるクジの再実施が叫ばれたが、この展開に呆れている男子生徒たちが率先して民族大移動を始めると、やがて諦めたように女子も動き出す。…すまん。男子生徒の諸君。俺も君らの立場なら呆れる。というかむしろ怒る。それどころか呪いすらしたかもしね。比較的大人しい男子ばかりのクラスで良かつたと心からそう思う。

窓際最前列から一、二と続き、廊下側最後尾の三十六で終わるこの順番、つまり俺の席は窓際から一列目、後ろから一番目、なかなかいいポジションだ。

「俺の席はここか。……一ヶ月よろしくな。お隣さん」  
「ええ。『また』一ヶ月よろしく。お隣さん」

右隣にいたのは見慣れたといつよりもはや見飽きた顔。美鈴。腐れ縁もここまで来るとすごい。もう鎖縁と表現を変えるべき。ま、気心が知れているってことではある意味よかつたのかもしれないけどな。

「で、左隣は……つと」

反対側に振り向いた俺は、ふわりと爽やかな柑橘系の香りに包ま

れる。

「、これは、まさか……！」

「一ヶ月、よろしくね山田君。いい席取れてよかつたー」  
そう言つて元気と微笑んだこの天使。いや違う。長谷川佐代子さん。

「……神様……！」

俺は思わず胸の前で十字を切る。いや別にクリスチャンって訳ではない。

それぐらい、うれしかったのだ。長谷川さんの隣が。

クラスでも立つ方じやない。でもきっと密かなファンは多いくらいだ。

思う。

綺麗に切り揃えられた前髪。でもそのさらさらの髪は実は腰に届くほど長く艶やかで。ちょっとたれ目がちな瞳と小さな口が上品さを醸し出し、それでいて常に笑顔で周囲に優しい雰囲気を振りまく。

何より。

『ハーレム機能』を手に入れる前の、凶悪な俺の目を避けることなくまっすぐ見つめ、他のクラスメイトたちに対する態度と一切変えることなく接してくれた彼女。それが当時の俺にとってどれほどうれしかったことか……。

「……山田君。山田くーん。おーい  
「は？」

危ない。幸せの余り思わずトリップしてしまった。もう異世界には用はないのに。

「…………」  
「…………」

クールに行こうぜクールに。

「はーい。……やー、実はこの席売つてくれって言われてたんだけどねー。口当たりいにし、やめとこてよかつたよー」

そう言つて陽だまりの猫のように田を細める長谷川さん。『俺の隣で良かつた』なんて、そこまで言つてくれる」とまでは期待しない。……それに、今の俺には『ハーレム機能』がついている。この力があれば、すぐに長谷川さんとも仲良く……。

つんつん。

「ん? なんだ?」

控え目に背中をつつかれる感触に、俺は振り返つて 絶句した。

そこにいたのは、長い前髪では隠しきれないほど瞳を輝かせた小鳥遊小鳥。

俺には小鳥遊がうれしさのあまり力一杯振り回している尻尾の幻想ら見える。何でお前そんなに子犬っぽいんだよ。お前鳥だろ。鳥類だろ。隼なんだろ。

残念。小鳥遊さんは人間でした。だから日本語を話します。小さな声で。

「やつた。やりましたよ晴樹くん。お隣にはなれませんでしたけど後ろです」

「俺の後ろに立つな

「無意識に撃つちまうから。

「授業中ずっと背中を見つめています」

「黒板見ろ

「俺の背中に穴が開くから。

「じゃあ語りかけます」

「ノートとれ

俺の背中に呪文喰くんじゃねえ。何か湧いて出てきたらどうする?

小鳥遊の発言一つ一つにダメ出しをする俺。でも小鳥遊の笑顔は崩れない。何だこいつ? やっぱりMなのか? 普通ここまで言われたら心折れないか?

「えへへ……なんか、いいですね。こうこうの

「お前やつぱりM……。つと。じゃない。……一体、何がいいんだ

?」「か、会話のキャッチボール?

「……

……その時俺の脳内には、俺が力一杯、明後日の方に向へ投げつけるフリスビーを全力疾走でうれしそうに追いかける子犬の姿が浮かんだ。……うん。ぴったりだ。

「ま、お前が楽しいのならそれでいいや。……くれぐれも言つておくけど、学校で魔法使うなよ。問題起こすなよ。俺に迷惑かけるなよ。わかったな

「はいっ!」

声は聞こえていないだろうが、そんなやり取りをする俺たちを興味深げに見つめる美鈴。……うーん。こいつ鋭いからなあ。千里眼

だし。気をつけないと……

ほんと、何もないことを祈るつ……。

往々にして、神様というのは案外性格が悪いものである。彼らは、真剣な願いであればあるほど、叶えてはくれない。

俺の真摯な願いは、早くも次の授業で裏切られる事になる。

カリカリカリ……。

鉛筆を走らせる音だけが、静かな教室に響く。

一時間目。数学の授業は小テストだった。

背後に不安を抱える俺にとって、ディスカッションをしろとか言われる授業よりテストのほうが、むしろ今は都合がいい。

「あつ……」

小さな声が隣から聞こえる。そつとそつちを見ると、長谷川さんが消しゴムを落とした模様。それはこころいろ転がり俺の足元へ。

……やるじやねえか『ハーレム機能』。ちょっと控え目なフラグだが、つかみとしてはむしろこのへりこへりうびっこ。

俺は数学担当の森先生に気付かれないと、そつと屈んで消しゴムを取るつとする。

「あ……」

もう一度、先程と同じ声。違つたのは発せられた位置。それは驚くほどすぐそばから聞こえた。具体的には、互いの吐息が顔にかかるくらいの近さから。

消しゴムを握つた俺の手は、柔らかく華奢な長谷川さんの手を掴んでいた。……俺に気を使って自分でとづいたのである。目の前に、俺と同じく屈みこんだ長谷川さんの、綺麗な白い顔がある。

「……」

俺は無音で叫び声をあげる。我ながら器用だと思つ。その表情に驚く長谷川さんは、しかし、すぐにいつものよつて優しく微笑み、そつと人差し指を立てて自分の口に充てる。

「しーっ……ねつ？」

「きゅーん。

撃ち抜かれた。いや、もう木つ端みじんに打ち碎かれた。おいでだらうそこの天使。なんでそんなに可愛いんだよちくしょう。ついでに神様。『ハーレム機能』をありがとう。また何かあつたら呼んでください。いつでも馳せ参ります。

……しかし、幸せな時間は長くは続かない。

キンというその微かな音。それに気がついた人は他にもいたかもしれない。しかし、その音の正確な意味を知るのはこの世でただ一人。いや一人だけだ。

その音は『向こう』でよく聞いた音。……すなわち、魔法の起動音。

慌てて目線を上げる。ちょっとだけ悲しげな表情をした小鳥遊。その視線は握りあつた俺と長谷川さんの手に固定されており、自身の発動する魔法に気が付いていない。

『「！」、「めんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくって……。」  
か、感情が高ぶつたりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって  
……！』

昨日の放課後、小鳥遊の言っていた言葉が脳裏によみがえる。

まずい。まずいまずいまずいまずい、まずい！！

命の危険もさることながら、このまま魔法が発動したら小鳥遊の正体がばれる。

現代社会に登場した魔法使いがどんな運命をたどるか、どう考えても悲惨な未来しか見えない。国に捕まり実験動物扱いとか、さすがにかわいそうだろ！

……気がついた時には体が勝手に動いていた。

「小鳥遊！」「こ」がわからん！ 教えてくれーーー！」  
「きやつー！」

振り向きざまにそう叫びつつ、小鳥遊の肩を押さえる俺。いきなりの事に驚いた小鳥遊から、無意識に発動しかかっていた魔法の気配が消える。よかつた間にあつた！

「おい小鳥遊。お前今魔法を……」

「え、あ、ああ！？」

「……つたく。仕方のないやつだなお前は」

「……仕方のないやつなのは、お前だ。山田」

「くつ？」

振り返るとそこには、鬼の表情をした森先生。わお。

「先生、教師生活は結構長いが、これほど堂々としたカンニングを見たのはこれが初めてだ。……何が、反論はあるか？」

「……あー、えー、はい。すいませんでした。全面的に俺が悪いです」

「ではこのテスト、お前の答案は没収。後日、補習で再実施ということでいいな」

「はい。もう先生のおっしゃるままに……」

おかしいなあ。俺、先生を含めたクラス全員の命の恩人のはずなんだけどなあ。

「とりあえず、廊下に立つてなさい」

「はい」

「すゞ」と廊下へと旅立つ俺に向か、何度も何度も涙目で頭を下げる小鳥遊。

……ま、いいよ。

さすがに鳥類魔物曰イヌ科の小鳥遊とはいって、実験動物にされるのを黙つて見ていたら夢見が悪いし。だからこれはお前のためじゃない、今後の俺の安眠の為にしたことだ。そんなに気にするな。……でも。でもな。そんな些細なことより許せんことがある。

無人の廊下に出た俺は、一人、魂の叫びをあげる。

「……くつそお!! セつかくいい雰囲気だったのに!! ……おのれ『隼のフラグブレイカー』!! 次は絶対負けないからなああああ!!」

がらつー!

「ひるさいぞ山田!! 廊下じゃなく外に出るか!! ああん??」「す、すいませんでした先生!! 静かにしてます!!」

……とほほ。



俺の隣の席がダフ屋に売買されています（後書き）

12／16、まさかのジャンル別日刊一位……。

信じられないといふか、「まさかドッキリ?」といふのが本音です。読んで頂いた皆さん、本当にありがとうございます。

多くのお気に入りだけではなく、ワールズエンド様から素敵なレビューまでつけて頂き、この作品は幸せ者ですね。

更新がんばります。

もしよろしければ感想が頂けたら、とも、とつてもうれしいです。これからもよろしくお願ひ致します。

米つきバッタといつものを「存じだらうか？」

日本名でショウウリュウバッタというバッタの通称である。こいつが後ろ脚を押さえられると、まるで米をつくように頭を上下に振ることからその名がついた。ちなみにその姿を揶揄してペコペコと頭を下げる人という意味に使つたりする。

何でそんないらん豆知識を披露するかつて？

その理由。それは今、俺の目の前に等身大（よりやや小さく）の米つきバッタがいるからだ。

「『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』……」

授業終了のチャイムと共に、弾丸の「」と廊下にいる俺の元に走り寄り、それはもうすくい勢いで頭を上下に振る小鳥遊。見てるこっちの目が回りそり。

「あー……。もういいから。うん。次から気をつけろ」

本当は全く許してなどいないが、小鳥遊本人の涙目よりも周囲の目が痛いのでそう言つておく。目つきの悪い俺に小柄な小鳥遊が頭を下げる姿は、他人から見たらチンピラが小学生女子相手にカツ上げしているようにしか見えないだろうし。

そういう訳で大変不本意ながら、もつ怒つてないぞーという意味を込め、「」三度軽く小鳥遊の頭をポンポンと叩き、俺は教室に戻る。置いてきぼりを食つた小鳥遊が肩を落としているようだが、ま、

少しほ反省してもうわないと困るし、いいだろ。

「おー。カンニングの現行犯だー。おかえりー」

間延びした声でそう言いつつ、俺を迎えてくれるお隣の天使。いや長谷川さん。

「あれ？ でも山田君、カンニングしなきゃいけないほど成績悪かつたつか？」

俺が答える前に、横から口を出してくるお隣の悪魔。いや美鈴。

「晴樹、数学は悪くないよ。前回のテストでもこのクラスで一位だつたし」

「よくそんな細かいことまで覚えてるな、美鈴」

「うん。だつて一位、私だし」

うわー性格悪いなーいつ。知つてたけど。

「だからカンニングの必要なんてないはずなんだけどね。……たゞがにもう、」まかしあきかないと思いつわよ？ 晴樹。悩みがあるなら言いなさい

「む……」

実は異世界からチート機能持ち帰った小鳥遊さんに迫られてるんです。

……言えねえ……。

「……すまん」

「や。無理には聞かないから言いたくなつたらひづれ」

これが美鈴の数少ない美点の一つ。ここには俺に対して踏み込み

過ぎることがない。なんだかんだと世話を焼きたがるが、ある一線を超えることはない。多分、この絶妙な間合いを維持できるからこそ、俺と美鈴は腐れ縁のままでいられるのだ。その点には、まあ、ほんの少しだけ感謝していなくもない。

「……あんたのことは、まあいいわ。でも『あれ』なんとかしたほうがいいわよ」

俺は美鈴の視線に合わせて『あれ』とやらを見る。……小鳥遊が掃除用具入れのロッカーとお話をしていた。……大丈夫かあいつ？ どうでもいいけど、隅っこが似合つなあ。小鳥遊。

「よく言ひでしょ？ 『ペットを飼うからにはちゃんと世話をしなさい』って。あんた、飼い主として何とかしなさい」「俺も結構ひどこ」と言ひほりだけど、お前には負ける。あと俺は飼い主じゃねえ」

友達をペット扱いするなよ。そりゃ確かに小鳥遊は小動物系だけじゃ。

「……ま、毎休みにでも話しておくよ。ありがとな。美鈴」

しかし、この日、『小鳥遊小鳥と語り合ひの毎休み』は来なかつたのである。

四時限目。相変わらず雑談の多い日本史の時間に、それは起きた。

「あー。次のページ。小鳥遊さん。読んでください」  
田中先生の「」括名は小鳥遊小鳥さん。

「……ん？」

返事がない。ただの……ではなく。どうした小鳥遊？ 今度は机とお話をすることに夢中で描かれて気がつかないのか？ 仕方ないな。

「おー、小鳥遊。描かれてる描かれてる。五十一ページから……」  
振り向いた俺はそこで言葉に詰まる。前髪に隠れていてわかりにくいが、小鳥遊の顔色が悪い。悪いといふか白い。え？ どうした小鳥遊？ 机にひどいこと言われて傷ついたのか？ チビとか小動物とM体質とか。

「あ、ごめんなさい。晴樹くん……。五十一ページ、ですね……」

「あ、おこ。顔色悪いぞ？ 平氣か

「だいじょぶですよ。だいじょぶ……」

バタン！

「うおー！」

無理して立ち上がりとした小鳥遊が前のめりに倒れる。つままり俺の方へ。

反射的に受け止めた俺は、その想像以上の軽さと細さに驚く。

「た、小鳥遊さん！ 山田君！ 平氣かね！？」

「お、俺は平氣です田中先生。でも小鳥遊が……」

完全にくたつとしている。おかしいのは顔色だけじゃない。なん

か変な汗をかいてるし、呼吸も早い気がする。

「おい。小鳥遊！　おいー？」

「ん……。『めんなさい。晴樹くん。なんか、くらべりして……』  
意識はあるみたいだ。一安心……はできないよな。仮にも女の子  
だし。

「田中先生。小鳥遊、体調悪いみたいで。このまま保健室行つて  
きます」

さう言って俺は器用に体を反転させ、小鳥遊を背負う。……うわ、  
やっぱり軽い！　これ本当に俺と同い年の人間の体かよ。女体の神  
秘だわ。

……「こでドラマや映画なら『お姫様抱っこ』とやらをしていく  
のだろうが、さすがにそれは……ねえ。いや、そんなこと考えてる  
場合じゃない。しつかりしろ俺。

「山田君。任せました。あとで担任に報告もお願いします  
」「了解しました。行つてきます」

「……疲れによる貧血。一、二時間寝てれば歩けるようになる。  
以上

そう男前に断言する人の人。擁護の吉田先生。眼鏡に白衣の美人  
教諭。

「言いいきりますねえ。ホントに大丈夫なんですか？」

「私の言つことを疑うのか？ ああん？」「滅相もございません失礼しました！」

この吉田先生に『ハーレム機能』が通用しない理由。それは極めてシンプル。

俺なんかより段違いに怖いのだ。この人の目。俺がチンピラクラスだとしたら吉田先生はもう完全に本職。ヤの付く職の人しか見えない。ヤート運輸の人ではないぞ。

俺の『ハーレム機能』は俺を嫌い避ける女性にしか通じない。つまり俺を恐れないし、嫌つてもいい、といつつか歯牙にもかけていない吉田先生には全く通じないのだ。

「ま、心配ならあとで様子を身に来い。……ほら、チャイムが鳴つた。ぐずぐずしてると昼飯食い損ねるぞ？」

「ん……。そうですね。じゃあ俺は戻ります。失礼しました」

「おひ。こいつも動けるようになつたら教室に戻す。担任にもそう伝えておいてくれ」

「イエッサー、ボス」

しかし小鳥遊は、昼休みが終わり、午後の授業が全て終わっても、教室に戻つてくることはなかつた。

「……はい。晴樹。これ」

西口差し込む放課後。考え込む俺の前にカバンと子犬模様の巾着

袋が置かれる。

「なんだこれ？ 荷物もちか？ 僕まだジャンケンしないんだけ  
ど？」

「小学生じゃあるまいし……。それ、小鳥ちやんの。行くんでしょ  
？ 保健室」

「待て美鈴。なぜ俺が保健室なんかに」

「顔に書いてある。『小鳥遊が気になる。でもどうしよう。行こう  
かなやめようかな』。……他の人はだましても、この私だけはだま  
せないよ。晴樹」「

降参。

「一時間田の事があるからな。小鳥遊も俺と顔合わせづらこんじや  
ないかと思ってる……って言つたら、これは『逃げ』かな？」  
「逃げ、だね。……ま、いいわ。そんな迷った顔見せるくらいなら  
今日はやめておいたほうがいいかもね。私が届けてあげ……」

そう言いつつ荷物を持ち上げた美鈴の声が止まる。何だ？

「……と、思つたけどやめた。やつぱり晴樹。あんたがいくべき。  
じゃあ私は帰るから、あとはよろしく。逃げるなよ。……あ。あ  
とこれ。あげる。飲みかけだけど」

そう言つて渡されたのはペットボトルのお茶。……なんだこれ？  
意味不明なんですけど美鈴さん。お茶でも飲んで落ちつけって意  
味か？

「どういつ意味だこれ……？ つて！ お、おい。美鈴！」

俺の制止の声に振り向きもせず、ひらひらーと手を振つて行ってしまう美鈴。意味がわからん。いいじゃんカバンくらい届けてやれよな。冷たい奴め。

仕方なく一人分の荷物を手に保健室に向かう。ほんと、今日は厄日だ……。

「失礼しまーっす。……あれ？ 先生いないのか……。おーい小鳥遊ー。少しばは体調戻ったかー？」  
荷物持つてきてやつたぞー」

わざわざ大声で言うのは、ベッドに横たわる女性に対する礼儀だ。もし衣類が乱れてたとしても、この声を聞いて正せる時間がとれるだろ？ うん。俺マジ紳士。あれだよ。無神経にカーテン開けたら、着替え中の美少女が「きやつ！」って悲鳴を上げるとか、そんなのは一流ハーレム師のやることなのさ。

「あ……は、晴樹くん！？ 『』ごめんなさいまた迷惑を」「いいから。友達だろ？ 気にすんな」

意識的に『友達』に力を入れてみる。効果、あるのかなあ？

「ほんとに私ダメダメで……。泣けてきます……」

俺の知る限り小鳥遊。お前は人生の半分近くを涙目で過ごしてい るような気がするんだが？ ま、それはどうでもいい。俺の人生じ ゃないし。

「で、もう平気なのか？ 体調？」

「は、はい。ぐつすり寝たので……。寝不足で倒れるなんて恥ずかしい……」

「そりか寝不足だったのか。そりや寝れば治るわな……って、おいノリ突つ込みつて難しい。芸人さんつて大変だ。……ではなく。

「人を散々心配させといて寝不足だあ！？ おいこら小鳥遊！」

俺はベッドに横たわる小動物を睨みつける。前髪のカーテンをも貫くその眼光に怯え、もぞもぞと布団に潜り込む小鳥遊。

「じ、実は、この二日ほど、あんまり寝てなくて……」「めんなさい」「あ、そっか。すまん。異世界からこっちに帰つて来たばかりだもんな。そりや向こうの事も魔王の事も気になるだろうし、寝れなくとも仕方ないか」

意外に纖細なんだなあこいつも。怒鳴つたりして悪かつたよ。

「一日前までは『じつひって晴樹くんに告白しようかー』って考えてたら眠れなくて、昨日は『ついに告白しちゃつた……』って思い返してたら寝れないし……で」

「何でお前の頭ん中は晴樹くんしかいねえんだよ！ 晴樹ハーレムかよ！ この鳥頭が！ あっちの世界の魔王とその一味に謝れ！ ついでに俺にも！」

「『ごめんなさい魔王さん。』めんなさい魔物さん。『めんなさい晴樹くん！』

律儀な奴め。あと魔王魔物と同列で俺に謝るな。なんか俺まで魔王の仲間みたいじゃねえか。俺、勇者だぞ一応。何もしなかつた

けど。風邪ウイルス万歳。

「……まつたく。もういい。俺は帰る。小鳥遊は念のためもう少し休んでろよ」

心配して損したわ。寝不足程度なら一人で帰れるだろ。

そう考えつつベッドに小鳥遊の荷物を置こうとして、うつかり巾着の紐を引っかけてしまう。子犬柄っていうのがこいつらしい。……と。中は見ちゃいかんよな。女の子の秘密のブツとか出てきたら気まずいし。

しかし、俺は見てしまった。入っていたものはそんなブツではなく……。

その巾着の中身。ピンクの小さい弁当箱と、それと比べるとやたらと大きい、明らかに男性用とわかるもつ一つの弁当箱。

……その意味を理解し、思わず固まってしまった俺。そして、黙り込んでしまった俺が気になつたのか恐る恐る布団から顔を出す小鳥遊。

「あつ……」

「あ、その、悪い。勝手に見るつもりはなかったんだ。なんか、こう、紐がベッドの柱に引っかかって……」

しぶりやぶりになる俺を見つめ、やがて寂しそうに微笑む小鳥遊。

「あはは……。それ。それも寝不足の原因なんですね。……晴樹くん、何が好きかなーとか、卵焼きは甘いほうがいいのかなーとか、いつしょにお昼とか幸せだなーとか、いろいろ考えてたら、何かすっしゃべ時間たつのが早くつて……」

「…………」

「でも、やっぱりダメですね私。せっかく作ってきても、肝心のお昼の時間にぐーすか寝ちゃうなんて。笑っちゃいますよね。バカですよねえ」

「うん。お前はバカだ。こんなハーレムが夢とか本氣で言つてる男にそこまで惚れてしまつたお前はバカだ。……でも、俺は笑わない。笑えるか。」

「……よこせ」  
「くつ？」  
「それ、よこせ。あと箸も」  
「は、はいっ！ どうぞっ！」  
「しゃばー！ そんな効果音がつきそつた勢いで箸と弁当箱が差し出される。

「お前も食え。昼、ぐーすか寝てて食つてないんだろっ。」

「え、でもここ保健室……」

「いいから！」

「は、はいい！ ……あ、でも飲み物が……」

どん。

「お茶でいいだろ？ 紙コップなら薬飲むとき用のがあるしな」「は、はあ……。用意周到なんですね……」

俺の、チートでピンポイントな千里眼の持ち主で、お節介な幼馴染が、な。

「いただきます」  
「い、いただきます」

「……小鳥遊。揚げ物にはソースだろ？」  
「え？ うちはマヨネーズですよ？」  
「このマヨラーが。ブルドック様とオタフク様に謝れ  
「マ、マヨネーズだつておいしいのに……」  
「明日もマヨネーズかけの揚げ物が出たら残すぞ」  
「そ、そんなに嫌がらなくとも……って。え？ 明日？」  
「もう一度言おうか？ 明日もマヨネーズかけの」「  
「は、はいっ！ 今日、帰りに買います！ ソース！ 各種！ 箱  
で大人買いします！ 買い占めます！ そして明日のおかずは原色  
が見えないほどソースまみれにしてきます！」  
「それはやめる。『高血圧で早く逝け』って意思表示かと思つちま  
うから」

「ク」「クと頷く小鳥遊。

「……心配だから監視する。メシ食つたらスーパー行くぞ。お前が  
ちゃんとソースを買って帰るか不安だからな。飼い主としてきちんと  
と見張る義務がある」「

「か、飼い主つて……。あと、さすがにソースくらい一人で買えま  
す……え？ あ、あれ？ それってもしかして送つてくれるって」

「その先を口にしたら今すぐ俺は帰るからな。一人で

慌てて口を両手で押さえる小鳥遊。オーバーアクションなやつだ。

……ま、あれだ。食いものには罪はない。

だから、今日は負けてやるよ。『隼のフラグブレイカー』

明日は容赦しないからな。『ハーレム機能』の真の力、見せ付けてやる。

「……は、晴樹くん、晴樹くん」

「なんだ？」

復讐に燃える俺に小声で話しかける小鳥遊。その手にはフォークに刺したタコさんワインナーが……。

「あ、あーん……」

「するかボケえ！ 調子に乗んなこの鳥類が！ こんな保健室にいられるか！ 僕はもう帰るぞ！」

「あ！ 「冗談です」ごめんなさい！ 待って！ 帰らないで！ おいてかないでええええ！！」

やつぱりダメだ！ ペットは甘やかすと付け上がる！

明日こそは泣かせてやるからな小鳥遊！ いつも泣いてる気もす

るナビ！　吠え面かかせてやるから覚悟しとこよー。

.....、「うわあつた。

**幼馴染は千里眼（後書き）**

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

## はじめてのおかいもの……は修羅場

「ここは姫神商店街。

調子に乗った小鳥遊の「あーん」発言により、買い物に付き合つ約束を本気でキャンセルしようとした俺に対し、小鳥遊はその小さな体の一体どこに……と思うようなすごい力でしがみつき、この世の終わりが来たような悲しい目で見上げてきた。

……あれだ。子犬のしつけで「お預け！」を教えようとした飼い主が、いざやつてみたらその子犬のあまりに切なげな表情に負けてしまつた……。そんな感じ。

結局、渋々ながら買い物に付き合つ俺は、多分、将来ペットブリーダーにはなれないと思つ。なる気も無いけどな。俺の夢はハーレム王だし。

「……な、なんか、すごいですよね。ほんと」「なにがだよ？」

「え、その……晴樹くんとお買い物すると節約になるなあ……って」

しみじじみとそつそつ呟く小鳥遊のマイバック（子犬柄）は、溢れんばかりの食材でぱんぱんだ。大根一本はいい。切り売りとかより新鮮そうだし。……白菜丸ごと一個、ネギが3本……小鳥遊家は今夜

はお鍋だなきつと。……「ンジン2本、ゴボウが5本……混ぜご飯の具としては最適だな。うん。……しかし二ンニク20個。カイワレ4パック、ナス6パック……」これらはどう処理するのだろう?特に二ンニク。窓から吊るして魔除けにでもするのだろうか?異世界の仲間たちやミシルちゃんが悲しむぞ?

当然、小さな小鳥遊の小さなマイバック(子犬柄……が限界まで詰め込まれた野菜のせいで引き伸ばされブルドック柄化している)にそんな大量の野菜類が収納しきれるわけは無く、大変に不本意ながら俺もその一部を持つ羽目になる。

「あ、あの、すいません。荷物持ちさせちゃって……」

「……そう思うならなぜこんなに買い込む? それとも小鳥遊家はTVが取材に来るような大家族なのか?」

「うちはお母さんと私の二人暮らしです。お父さんは単身赴任で海外です」

「そりや寂しいな。……おいままで。一人暮らしでこの量つて……?」「だ、だつてそれは……」

「あっ! 小鳥ちゃん! 今日は鶏肉のいいのが入ってるよー。買つていきなよ! ……あれ? その人は彼氏かい?」

「あ。お肉屋のおばちゃん。こんばんは。……この人は、お友達、の、晴樹くんです」

『お友達』のあたりで少し言葉に詰まっていたが、気が付かなかつたことにする。

「へえ、そりゃうかにそりゃうかい……いやあ、いに男だねえ！おばちゃん気に入つた！よし、今日の特売品のこの上ロース、十円でいいやー、もってきなー、お兄ちゃん！」

「じゅ、十巴ー？」ありがとびじゅこめすおせりやんー。頂きます

「いやまた小鳥遊！ これ以上まだ買つのか！ 肉だからか！？」  
やつぱりイヌ科なのかお前！？」

「だつて十円です！ 買います！ 買わざにはいられません！」  
「そ、そのかわり、小鳥ちゃん……。またそのお友達、連れてくる

「はい！ 任せください！」

「てめえ小鳥遊！ 勝手に俺を売るな！ あと肉屋のおばちゃん！ 心配しないで、今度は俺一人で来ますよ。素敵なあなた！」金

二二

「ああー、お肉屋のおばちゃんが恋する乙女の顔になつてますー。」

……そう。 そうなのだ。 今の俺は『ハーレム機能』全開中。

さしきからす」と、どの店に入つても店番が女性であればこの調子で、値引きとおまけのフルコース。また小鳥遊が『値引き』とか『おまけ』とかいう言葉に弱く、勧められるもの全部受け取るのでこの有様。……しかし上口ース十円つて何の冗談だ。怪しげな生き物の肉ではないだろうな？ ミシリちゃんとかの。明日の弁当には注意したほうがいいかもしれん。

しかし。

「……なあ、小鳥遊。お前、気にならないの？」

「はい？ 何がですか？」

「なについて……あー、やつぱいにや

「？？？」

……普通や、自分が好きな相手に他の女性が色目使つてゐるのを見たら気にならないか？ 僕、長谷川さんに声かけるナンパ野郎見つけたら呪づか？

「やつぱり男の人とお買いものするのっていいですねえ。荷物持つてもらえるし、何よりその相手が、か、かつこいいと、おまけまでしてもらえますし……えへへ」

「照れるべつになら言つな

小鳥遊さん、超ご機嫌。……何か納得がいかない。こいつには嫉妬とかいう感情が存在しないのかもなあ。……試してみるか。

「小鳥遊。ちょっと休憩しないか？ ワックあたりで」

日本中にあるファーストフード『ワック』。正確にはワクドナルド。関西では『ワクド』と呼ぶのが一般的。

「わつく……？ 女性自衛官教育隊のことですか？」

「そりやWACだ！ ここは朝霞じやねえ！ 東部方面混成団は駐屯してねえよ！」

……なんで知つてんだよそんな自衛隊豆知識！ 本気で驚いたわ！  
……ああ、この会話に興味を持った人がいるのならばあとでググる

といい。検索ワードは『女性自衛官』な。

え？ なんで俺が知ってるのかつて？ そりゃあんた、軍服着た女性は美しい。それ以上の説明が必要か？ いらんだろ？ いるわけがない。

「あ、ワクドナルド屋さんのことですね」

なんだよワクドナルド屋をいつて。お前は田舎のおばあちゃんか。

「い、いいですけど……。私、あんまり利用したことがないので……」

「へえ。珍しいな今時。ファーストフード嫌いなのか？」

「いえ。そういうわけでは……。ああいうお店つて、女の子一人で入るのって結構勇気がいるんですよ？」

「そういうもんかねえ」

言外にある『私、あんまり友達いないので……』とこう言葉に気がつかないふりをしてあげる俺は優しいと思つ。まあ、こいつも俺と同レベルくらいのぼつちっぽいしなあ。

「で、でも晴樹くんといっしょなうどいのも行きます！ たとえ異世界でも！」

「いや。俺はもうあっちには行きたくないから。行くならお前ひとりで行け」

「……冷たいです。晴樹くん……」

恨みがましい目で俺を見る小鳥遊を連れ、ワック店内に入る。実際、疲れてはいないが喉が渇いているのだ。

我が幼馴染、美鈴からもうつたお茶。その行為自体には感謝している。が。

そのお茶、えらく濃厚な抹茶風味のお茶で食事のお供には向かなかつた。何しろ飲むことによつてかえつて喉が渴くレベル。その名も『濃い』。お茶。……これを開発販売したメーカーは利益よりも笑いをとることを狙つているとしか思えない。倒産してしまえ。

俺はカウンターの店員を見る。……よし。バイトの女の子、多分女子高生だな。

……狙いは単純。さつきの商店街での買い物では、個人商店中心に回つっていたため、年配の女性とのやり取りばかりだつた。……それゆえ、鈍い小鳥遊では嫉妬心が働くなかつたのかもしれない。だからこいついう店で、自分と同年輩の女の子を俺が口説く姿を見せれば、さすがの小鳥遊でも何らかの反応は示すはず……。

願わくば、『こんな誰にでも声をかけてしまうハーレム男なんて嫌いだわ!』という展開になつてほしい。……それを狙つて、この買い物中ずっと『ハーレム機能』を全開にしているのだ。これで小鳥遊が俺に幻滅してくれなければ、安く大量の食材を手に入れたこいつの一人勝ちになつてしまつ。それは避けたい。

「腹は減つてないよな。飲み物だけでいいか? 小鳥遊?」

「はい。お任せします」

「ん。……すいません。注文いいですか?」

俺はカウンターの女の子に近づく。

「いらっしゃいませーーーんにちわーー」注文をどうぞーー  
いかにも『アルバイトです』といつ投げやりな雰囲気の店員さん。  
しかし。

「ウーロン茶ふたつ。以上で  
「はい。ありがとうございます……い？  
ます？」

みるみるうちに赤くなる店員さん。……ハーレム機能、発動。

「あ、あの！」「こっしょに私はいかがですか！？」

「今なら『可憐にわ・た・し』キャンペーン中に無料でついてきます」

「ありがとうございます！」 いやらでお口上がりですか！？ それともお持ち帰りしますか！？ 制服は着たままのほうがいいですか！？」

すゞい勢いで迫つてくる彼女。さうして後ろから別の店員さんも身を乗り出してくる。

「お得なセットはいかがでしょう！？」  
今なら私も付いてきますー。」

「あなたは調理担当でしょ！　後ろでポテトでも揚げてなさい！」

「なにをーーー！」

カウンターで取つ組み合いのけんかが始まる。いわゆるひとつ修羅場といつやつである。原因はこの俺。俺が色目を使ったから。……思惑通りとはいえたよと罪悪感が沸く。「めんな店員さん。今度お詫びにお持ち帰りするから許してくれよ。その時は制服着用で頼む。

さあ、この様子を見れば、さすがの小鳥遊でも……。

「は、晴樹くん。見てくださいー。お子様セットのおまけ！ ワンちゃんのぬいぐるみです！ すついじく可愛いですー。」

まつたく見ていなかつた。

「てめえ小鳥遊！ 目を輝かせながら何を見てやがるー！」

「メニュー見てます！ ほらー。百十九種類あるみたいですよ！ 買い止めましょうー！」

「なんだとー？ あこじぎな商売にもほどがあるぞワック！ 小学生の娘さんにコンプリートせがまれるお父さんの立場になつてみろ！ お小遣いいくらあつても足りねえじやないかー……じゃねえええええーーー！」

カウンターの前では怒りの叫び声を上げる俺。カウンターの内側では接客そっちのけで喧嘩している店員たち。まさに阿鼻叫喚。

そして、そんな騒ぎにま田もくれずお子様セシートのメニュー前に張り付く小鳥遊。

……俺の心が、折れた。

さすがにいたたまれず、テイクアウトに変更した俺たち。店員さんたちいじめん。

今は最後の買い物であるソースを求め、スーパー『ニヤオン』に向かう途中。

「……なんか、騒がしいお店でしたねえ」

ちゅうちゅうとウーロン茶を吸う小鳥遊。実に小学生っぽい。

「真の原因はお前なんだけどな……。もういいや。疲れたから直球で聞くぞ？」

「はい？ なんですか？」

「お前さ、俺が他の女の子と仲良くしてても気にならないの？ お前、俺のこと……好き、なんだろ？」

「わあ恥ずかしい。自分で言つとホント恥ずかしい！」

最初、俺の言葉の意味がわからなかつたのか、きょとんとし

ていた小鳥遊は、やがてここにこしては珍しくヒヒと笑つて言った。

「別に気になりませんよ？ だつて晴樹くん、かつこいいし優しいし、女の子に好かれるのは当たり前ですから。……だつて私が好きになつた人ですもの」

……絶句した。

俺の全力の直球が、場外ホームランで打ち返された氣分。

「確かに晴樹くん。最近急にモテるようになつたなあ……とは思つてます。でも、そんなのむしろ遅かつたくらいです。だつてこんなに優しいんですから。……でも、ですね。晴樹くんの魅力に一番最初に気がついたのは私ですからね。……だから、別に平氣ですよ」

…………こつは、こつは、こつはもつー 本当にー ああああ  
もつーーーーー

「は、恥ずかしいこと言つてんじゃねえよ！ むらーー いくぞ！」  
「はいー どこまでもついてきますー！」

『一級フラグ建築士』、山田晴樹、完敗。

……しかし、波乱万丈だった今日は、まだ終わらない。

ラスボスは、スーパー『ニヤオン』で待ち構えていたのだ。

夕方のタイムサービス狙いでごつた返すスーパー『ニヤオン』に足を踏み入れた俺たちに、いつもの間延びした声で話しかけてきたその人物。……彼女の名前は。

「あれー？ 山田君と小鳥ちゃんだあ。一人もお買い物のかなー？」

長谷川 佐代子という。

## せじゆのおかしもの……は修羅場（後書き）

今回は構成上、ちょっと短めになりました。  
ちなみに作中のWACは実在します。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

## 野望の理由

四月。桜舞い散る入学式。

「……ほら。晴樹。いつまでも拗ねてないでさあ……」「ほつといてくれ美鈴……。どうせ俺なんかヤンキーなんだ……」

新しい環境。新しいクラスメイト。俺は期待していた。この西の名門といわれる姫神学園の生徒なら、俺を見た目だけで不良と決め付けずに接してくれるであろうと。

しかし現実は非情である。

出席番号順で隣の席となつた女子には、初対面で「ひつ……」と息を呑まれ、また背後からはひそひそと、「なんでこの学園に不良がいるんだよ……」と咳かれ、あげくのはてには担任ですら、クラスで唯一、俺にだけ名前に『君』ではなく『さん』とつける始末。

やむぐれもしようつるものである。……またその態度がさらりと誤解に拍車をかけてしまう悪循環。もうやだ。引きこもりうかぬ？  
凛子画面から出でこないかな。

「あーはいはい。愚痴なら後で聞くからや。とにかくしつちきなさい。先生が四人一組になれってさ。オリエンテーションするそうよ」

……学校の先生と言つのは、時にとても残酷だ。『一人一組になつてー』。この悪魔の言葉に怯えるぼっちは如何に多いかと言つことを、奴らは知らない。

「……俺はいこよ。余り者同士で組むからさ。俺に構つているとお前まで孤立しちまつぞ？だからさつとと行け。気持ちだけ受け取つとくからせ」

「あーもー……。面倒くさい男だなー 晴樹は！」

「そう思つならまつとけ！ いいから早く俺以外と」

その言葉は、春風に乗つてふわりと漂う柑橘系の香りによつて中断される。

「あのー、お話し中すいませーん。まだ四人揃つませんかー？ もしそうなら、良かつたら私も入れて欲しいなー……なーんて」

俺と美鈴は舌戦を中断し発言の主を見る。さらさらの黒髪。愛嬌のあるちよつとたれ目がちのその瞳。そしてその笑顔。まるで春の陽だまりのように優しく暖かい。

「長谷川佐代子つていいますー。やー、我慢できなくてトイレ言つてる間にすっかりグループ作りに出遅れてしまいましてー。仲間に入れてくれたらありがたいなーと」

「あ、うん！ もちろん！ 私は美鈴！ 前田美鈴ね！ で、こいつの田つきと第一印象の悪いのが晴樹！ 山田晴樹！ ようじくー！」

おい美鈴てめえ初対面の女の子に俺のトラウマ暴露すんなー。  
そんなこと言つたら、せつかく話しかけてくれたこの子が怯えて

……。

「はあい。」  
「あらーそー。美鈴さんに山田君。一年間ようじくねー」

。「…………」。

……あれ？

「…………ね、ねえ？ 長谷川さん？ 变な事聞くようだけど、このこと怖くないの？ この晴樹の、特に田と性格」「田はともかく初対面で怖がられるような性格はしてねえよ！」  
そんな的確に人の心を傷つけるお前のほうがよっぽどひどい性格だわ！

「んー？ 山田君は怖い人なんですかー？」

「え。い、いやそんなことないと自分では思つけど……。どう違う？」

「なんで自分のことなのに疑問系なのよ晴樹……」

仕方ねえだろ？美鈴！ 生まれてこの方、お前以外の女の子とこんなにまともに会話したことがねえんだからさー。そら緊張もするわ！

…………真剣な表情の長谷川さんに上から下までじーっと見つめられる。あ、田。田は見ないで。他はともかく田つきは確かに悪いって自覚あるし。だから田は……。

「別に怖くないですよー？ これから仲良くなさいねえ」

長谷川さん、いや現世に降り立つた天使はいつも一度微笑んだ。

俺は長谷川さんに、出会って五分で惚れた。

「よ、よろしくなー 長谷川さんー わあ、さっさと四人組作ろうか！ 僕と長谷川さんと美鈴……。あー！ おにそこのちつちやいの！ お前だお前！ そこの影の薄そなお前！ まだグループ作つてないだろー ひちこによつちー ここ、あと一人で揃うんだ！」

十一月。あちこちに死闘の後が残る異世界。その地に立つ神は言った。

「……お主のおかげでこの世界には平和が戻った。元の世界に戻す前に、心からの礼を言ひた。……どうした？ なぜ泣いておるのじや勇者よ？」

「だ、だって、だって……ヒックヒック」

一日で滅びるなよ魔王軍ー これじゃ俺、何の為にこの世界に来たのかわからんねえよ！

この世界の平和なんてどうでもよかつたんだよ！ 僕は俺に冷たい現実世界に絶望して、俺のことが大好きなあの子たちといちゃつくためにここに来たのにーー

ああ、シンデレラ姫が武骨な女戦士が無口な女魔法使いが貞淑な女神官が可愛い獣娘が俺との別れを嘆き泣きながら手を振っている。帰りたくないよつ……。

「……その涙……われらのために泣いてくれるのか勇者よ……」

ちげえし。

「お主の優しさには感服した。本来、認められぬことだが、元の世界に返す際、何かひとつ願いをかなえてやるとしよう。わたくかな礼じや」

「え！ マジド！ ？ ジヤ、ジヤあ、ジヤあ！ ……」

「長谷川佐代子さんがあのことを好きになるようにしてくだせ」…」

「長谷川……？ ああ。元の世界の女性か。……すまぬ勇者よ。わかれはこの世界の神ゆえ、お前の世界の住人に直接関わることとは適わぬのじや」

「ちつ！ 使えねえな神！ 滅びろ！ パルス！ パルスパルスパルス！」

「ちくしょう……。やつぱり神なんていないんだ……」

「いやいるし。いいにこむし。お前の田の前にいるし」

神のつくりみが鬱陶しい。口調まで違つじやねえか！ なめんな

！ ！

「お前の世界にいる者に何かをする事はできぬ。ゆえにこうしたらどうであろう？ ……元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに『えた能力を持つたまま帰ることを許そ』う。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まつてこる。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるよ！」してくれ！」

……長谷川さん一人だけを手に入れることが出来ないのなら、全世界の女性ごと全てもらってしまえばいいのだ！ 俺自身を『ハーレム機能』に特化させ 現実世界にハーレムを作り上げてやる！ そしていつかそこに100%理想の彼女、すなわち長谷川佐代子さんをも迎え入れるのだ！！

ハーレム王に、俺はなる。

そして、今。現実世界。スーパー『ニヤオン』入口。

「あれー？ 山田君と小鳥ちやんだあ。二人もお買い物のかなー？」

なんという幸運！ 愛しの長谷川さんに偶然出会えるとは！  
…あ、いや、ちょっと待て。……あれ？ 二人？ これ下手したら誤解されるんじゃ……。

「あれー？ あれあれあれー？ もしかして私、おじやま虫ー？ はさんで捨てられちゃう感じかなー？」

わよとんと首を傾げ、立てた指を頬にあてる長谷川さん。可愛い  
！ じゃなく！ あああやつぱり誤解されてる！ ついでに挟んで  
捨てるのは泣き虫とモモンガな！

「ち、ちがうちがう！ 長谷川さん勘違い！ 俺はこのマリナー小  
鳥遊にソースの素晴らしさを教えるために……！ なー 小鳥遊！  
もうだよな！」

「…………」

「ん？ おい。小鳥遊？ 小鳥遊！」

「あ、はい！ そうですそうです長谷川さん！ 晴樹くんが『一日  
だけ待つてくれ。お前に本物のソースというものを見せてやる……』  
つて」

「言つてねえよそんなこと…」

どこのゲータラ新聞記者だよ俺は！ 見ろ長谷川さんがひいて…  
ひいて？

とにかく歩いて行つた長谷川さんが棚から取つたのは一本のボトル。  
なんだ？

「このソースを作つたのは誰だあ！ 女将をよべい！」

「ちよつとまつて長谷川さん！ 作つたのメーカーだから！ 女将  
とかじゃないから…」

てへーと笑う海原……ではない。長谷川さん。迫力が足りないよ。  
あの料亭の主人は間違つてもそんな可愛い顔で微笑んだりしない。  
愛らしさなら圧勝だけど。

「どうかなー？ にてたー？ ものまねー」

「ううん。全然。まつたく」

可愛すぎるのも問題つてことだ。長谷川さんは悪役のマネは出来ない。

「ちえー。残念。……でも、そつか。ただのお買いものなんだね。私、てつきり山田君と小鳥遊さん、デートなのかなーって思っちゃつたよー」

「ないないない」

「まー確かに、デートでスーパーっていうのも……、んー、アリかな?」

「アリなのか? なにすんだよスーパーで?」

「『オススメ! 彼女と廻る試食コーナーの旅!』とかどうかなー?」

「いいの長谷川さん! ? そんな貧乏くさいデートでいいの! ?」

驚愕した俺の突っ込みに、長谷川さんは意外なほど真面目な、ちよつとお姉さんぶつた表情で立てた人さし指を目の前で振りつつ言う。

「わかつてないねえ。山田君はー。……好きな人といっしょなら、どこにいても、何をしてても楽しいのが乙女というものなのさー。あつはつはー」

…………至高の言葉。頂きました。心のメモ帳に付けておきます。うん。

「……で、長谷川さんのほうは買い物なの？」

「うんー。私はお母さんと一緒に

え？ まじで？ ちょっと挨拶とかしちゃ おうかな。 「お嬢さん  
とお付き合こと結婚させて頂く予定の山田と申します」 とか何とか  
言つねやつて。

「お母さん、今うつ病でー

脳内で長谷川さんの頑固お父さんに向正座して頭を下げるシーンまで高速展開していた俺は、長谷川さんのその声で我に返り、その指示す先を見る。

「ん？」『タイムセール！豚汁無料配布中！』か

広い駐車場の一角。そこに簡易テントを備え付け豚汁の無料配布をしているらしい。言われて気がついたが食欲を誘う匂いが風に乗ってここまで来ている。

「もうすすぐり飯だからせめみつねー……って言つたんだけどねえー」「あれだ長谷川さん。主婦はほり、『無料』とか『おまけ』って言葉に弱いからな。さつきもこの小鳥遊だつて、もう持ち切れないほどのおまけを……。ん? 小鳥遊?」

隣にいるはずの小鳥遊が妙に大人しい。反応が鈍いな。おいお前どうし……

「…………！　おい！　小鳥遊！　おい！…」

小鳥遊の瞳から光が消えていた。のっぺりとした漆黒。目だけではない。その表情。一切の感情が削ぎ落したようなその顔。まさか、まさかまさかまさか！！

「おん！－！」

腹に響く轟音が無料配布イベント会場のまづから聞こえた。

「なつ……！」

音の反応した俺が見たもの。それはイベント会場備え付けのコンロから軽く3mは伸びあがった炎の柱。プロパンガスの爆発ではない。テントの外に設置してあるそれはどう見ても無事だ。そもそもあれはプロパンガスの火力じゃありえない。

紅蓮の炎はコンロ上の鍋を吹き飛ばし、テントの布製の屋根を舐めつくり、やがて徐々に『何か』の姿を形成しようとしている。

ギロリ。

そんな音が聞こえた気がした。あの炎、あれには意思がある。その証拠に炎の中に瞳の様なものが見える。現代社会の人間にとつては『目の錯覚』『気のせい』扱いされるだろうが、異世界からの帰還者である俺には、はつきりとそれが認識できる。

あれは、きっと、火の精霊。つまり小鳥遊の召喚魔法が発動していること。

「えつ！　えつ！　なにかなあれ！　ごめん山田君！　私、ちょっとお母さんのところへ行つてくるね！」

「お、おう！　長谷川さん！　気を付けて！」

危険かもしない。止めるべきかもしない。でも俺は『これ』の原因を知っている。長谷川さんの身を案じるならば、今は一刻も早くその原因を何とかするべきだ。

「小鳥遊！　おい小鳥遊！　しつかりしろ！」

肩を掴んで揺さぶる。反応がない。まるで人形を振り回している気分だ。何でだ！？　数学の授業の時はこれで止まつたじゃないか！

……唐突に異世界の事が思い出される。無口な魔法使いが言つていた言葉。

『精霊召喚魔法を使うと、術者はやがてトランス状態になる。外部からの反応に極端に鈍くなり無防備になる。……だから、私が精霊召喚魔法を使う時は、ハルキ、あなたが守つて』

「なんていこつた……。他に手はねえのか？　働け俺の頭！－！」

……次に思い出したのは有名なラノベの一シーン。確か映画にもなったはず。

小鳥遊と同じように無意識で、いや夢の中でだったかな？　とにかく不思議な力を使ってしまったヒロインを正気に戻すのに主人公が使った手は……。

「き、き、き……」

キス……だつた。　やだ照れる。……じゃねえー！

がつと力を入れ小鳥遊の肩を掴む。正面からその小さな顔を見る。その下の方。自然に軽く開かれた唇。今は寒さのせいかちょっと色を失ってるそこ。すげー柔らかそうな……。

『ぐぐり。

で、できるのか俺！？　しちゃうのか僕！？　やるしかないのかオイラ！？

いや待て落ちつけ山田晴樹。これは言わば緊急避難！　ほらあれだよ海で溺れた少女を助けるために人工呼吸するじゃないか！　あれと同じだつて！　命を助けて強制わいせつ罪で訴えられたつて話も聞かないしな！　どうでもいいけど『溺れた少女に人工呼吸したら訴えられました』ってなんか最近のラノベのタイトルっぽいな！将来作家になつたらそんな話書いてみようか！……つてええええ！！　落ちつけ俺！　脱線してる！　混乱するな覚悟決めろ！

「す、すまん小鳥遊。……許せ！」

そう呟くと俺は小鳥遊に顔を近づかる。……うわあ、まつ毛なげえ。肌しろいー。しかもすべすべー。そ、そして膚。や、やわ、やわ、やわらかそうで……。

「……って……！ できるかボケえ……！」

俺はそう叫んで店内に猛ダッシュ。ショーケース内にあつたそれを掴み、ヒターンして戻ってくる。結果的に火事場泥棒の万引き状態になっているが、金は後で払う。今は『あれ』を何とかしないと……！

「小鳥遊いい！！！ 田え、覚ませええええええええ……！」

びたん。

その脣ではなく、左右両方のちょっと横。よく伸びそうなその類にそれを押しつける。

一、二、三、四、五……

「……ひゃ、ひゃあああー！ つづつべたいー！ な、なんですか  
いつたい！？」

「よつしゃああああああー……！」

おっし！ やつた！ さすがアイスの王様『カリカリ君』！！  
伊達にコーラ味とソーダ味はしていない！ 意味わからんねえよ俺！  
とにかく成功！ わーい！

反応が無くなるのではない。『極端に鈍くなる』のなりば、  
それを上回る刺激を『えでやればいいのだ。例えば、凍るような寒  
い冬の夜に、地肌にアイスを押しつけるような……な。

「話はあとだ！ とにかくあれ！ あれお前の仕業だろ！ なんと  
かしり！」

「え……。あ！ あ！ あ！ わ、私、私また……」

「反省するのも落ち込むのもあとだ！ 小鳥遊！」

「は、はいっ！」

慌てて手を組み何かの詠唱を始める小鳥遊。

途端にその威力を失い始める火の柱。……それは徐々にその姿を  
小さくしていき、やがて消える。……消え去る直前、ある筈のない  
瞳に睨まれたような気がしたが、見なかつことにする。

「…………」

……騒動は、終わった。

「……あ。いたいたー。おーい山田ーん小鳥遊ーん

ヤジ馬から抜け出してきた長谷川さんが無言で立む俺たちを見つけ、近寄ってく。無事なよひで向よつた。ああよかつた。

「お母さん、平氣だつた?」

俺の将来の義理の母は。

「うんー。お母さんだけじゃなくてねー、怪我人は一人もいないらしいよー。でも驚いたし、今日はこのまま帰ろうつって。だから、じゃーねー。ふたりともー。またあしたー」

そう言つて小さく手を振る長谷川さん。それに返しつつ、俺は小声で言つ。

「わー……」

びくつ。

俺の言葉に反応する小鳥遊。

「…………」「めんなさい。晴樹くん。あの…………」「めんなさい」

「謝罪はもついい。何度も聞いたからな。ただ、ちゃんと話してもういちど? 時間、平氣か? ……悪いけど、ダメって言われても今口は話すまで帰さないけどな」

なこしきりちま命がかかつてゐる。門限破りへらつては覚悟してもうおへ。

「……はー

そう呟いた小鳥遊は、こつもよつもさりに小さく、髪げに見えた。

「……ほれ。何が好きか知らんからお茶にした。受け取れ」

俺はそう言って、ベンチに座り俯く小鳥遊にペットボトルのお茶を差し出す。『はあっ！ お茶っ！』といつその商品名にはもはや突っ込む氣にもなれない。当然、『濃い。お茶』と同メーカーの商品である。商品名に感嘆符つけるとか、そろそろ本氣でこの会社は開発陣を変えたほうがいい。

「ありがとう……『やー』ます。お金、払います。いくらですか？」  
「いいよジユース代くら。……それより一気に飲むなよそれ。力イロ代わりなんだからな。『やー』、寒いし」

……………そつなのだ。『はー』スーパー『ニヤオン』近くの公園。……………  
すじぐ、寒い。

『ニヤオン』駐車場は小鳥遊の引き起こした騒動のせいでの警察やら消防やらヤジ馬やらでとても話が出来る状態ではなく、ここに市場所を動かした。

俺も小鳥遊の隣に腰掛け、自分用の缶コーヒーを手に弄びつつ小鳥遊が話しだすのを待つ。

手持無沙汰に、何となく空を見上げる。オリオン座が綺麗だった。

「……ごめん、なさい」

やがて隣から聞こえた声は、余りにも小さく、うつかり聞きもらしそうになつた。

「いやもう、だからな？ 謝るのはいいって。幸い、怪我人も出なかつたし火事になつた訳でもない。……まあ、テントは燃えたけど。保険で何となるだろ。だからさ、俺が聞きたいのはそういうことじゃなく、その……何で、なんだ？」

この『何で』の意味はさすがに鈍い小鳥遊でもわかるだろ。

俺があれほど多くのハーレムフラグを立てても、まったく動じなかつた小鳥遊が、『何で』あの時、感情を昂ぶらせて魔法発動に至つたのか？

俺には聞く権利くらいはあるよな。

「……言わないと、ダメですか？」

俯きつつそう問い合わせる小鳥遊。当たり前だ。しかし……。

「どうしても言えない……っていうのなら仕方ないけど……。ああそつか。例えばお前を呼び出した魔王の秘密が絡んで、言つたら殺されるとか言う事情なら言わなくていいぞ」

何しろ相手は魔王だしな。そういうこともあるだろ。

しかし小鳥遊は力なく首を振る。

「そういうのはありません……。晴樹くん、本気でわかりませんか？ それともいじわるでそう言つてますか？ どちらですか？」

「わかんねーよ。なんだよいじわるつて。人聞きが悪い」「俺がいつもおまえをいじめてるみたいじゃねーか。

やがて静かに、小鳥遊が立ち上がる。

何かを覚悟した表情をして、まっすぐ俺を見て、その小さな口を開ける。

「長谷川さん、が、いたからです。……晴樹くんが好きな、長谷川さんがいたから」

……俺の手から缶コーヒーが滑り落ちる。

無人の公園に、カラソンという乾いた音が響いた。

## 野望の理由（後書き）

「」意見、感想などが頂けたらうれしいです。

続きは本日中に予約投下されます。

## 彼女の秘密、そして異世界ハーレム彼女の逆襲！

「……na、naninawoitterunndatakanasi。  
……sonnawakenaidarou?」

「晴樹くん晴樹くん。動搖しそぎです。日本語になつてないどころか英語にもなつません。それだけのアルファベットです」

なんで声だけでそうわかるんだよ小鳥遊。いやまあ事実だけど。

「ホン。

「何を言つてるんだ小鳥遊。……そんなわけないだろ？」「……さすがに、今の反応の後で、それは通じませんよ、ね。晴樹くん」

悲しげな声で続ける小鳥遊。

「好き、なんですね？」 晴樹くん。長谷川さんの事が。ずっと前から

喉が、はりつく。言葉が、出ない。

「……自慢じゃないが俺にはいわゆる『恋バナ』をするような友達はない。そもそも友達 자체がない。だから、俺の想いを知っている奴なんて、きっと美鈴しかいない。あいつは多分、何も言わないけど気が付いていると思う。……でも美鈴は、俺の密かな想いを他人に話したりは、絶対しない。ってことは、お前まさか……。

「小鳥遊、お前もしかして魔法で俺の」

「その先を言つたら、いくら晴樹くんでも許しません。魔法で人の、好きな人の心を盗み見るなんてこと、私は絶対にしません」「……すまん。今のは俺が悪かった」

俺は頭を下げる。今のは俺が悪い。十対零で俺が悪い。保険適用外だ。

「でも、じゃあなんで俺の気持ちを……」「

小鳥遊は微笑む。悲しげに、寂しげに。目にうつすらと涙を浮かべつつ。

「そんなの簡単ですよ。……私、ずっと前から晴樹くんが好きでした。だからいつも晴樹くんのことを見てました。……だから、気がついちゃいました。晴樹くんが、誰を見ているのかを。……いつも一人でいて表情が変わらない晴樹くんが、美鈴さんと長谷川さんにだけは、怒った顔と楽しそうな笑顔を浮かべることを

俺は、俺は何も言い返せない。

「美鈴さんは、いいんです。幼馴染ですよね？　彼氏彼女っていうより、本当に気心が知れた仲間みたいな感じでしたから。……でも、長谷川さんは違いますよね？　長谷川さんとお話している晴樹くんは、本当に楽しそう、あ、ちょっと違いますね。本当にうれしそうで、それを見ていると胸が痛くなつて」

ぱりっと、小鳥遊の瞳から小さな光の粒が流れ落ちる。世の中には、綺麗な涙つてものが、存在するらしい。

「晴樹くん』を『誰が好きになつても私は平氣です。さうと言つたことは嘘じやないです。……でも、晴樹くん』が『好きな人には、私はダメな子だから、嫉妬、しちゃいます。……だからさつきも、気持ちが抑えきれなくなつて、あんなことになつちゃいました。……ごめんなさい。晴樹くん。ごめんなさい』

神様。ごめんなさい。

鈍かつたのは俺の方でした。どうしようもないやつです俺は。俺はこんなにも想われていたといつのに、気付きもしませんでした。

ハーレム王、失格ですね。

しばらく、一人とも無言だつた。  
でも俺には聞きたいことがある。いや聞きたいことが出来た。これを見るのは残酷なことなんだろうか?

「……何で、俺?」

きつかけが、わからない。クラスでは、というよりもっとスケールが大きくこの世界では嫌われていたはずだぞ。俺。この日のせいだ。

「……入学式。オリエンテーション。四人一組つて言われても、友達いなくつて誰とも組めず、知らない人にお願いする勇気もなかつた私を、強引に自分のグループに入ってくれたのは、晴樹くん。あなたでした。……正直に言いますね。出会つて五分で恋に落ちました。ほとんど一日惚れでした」

……痛い。心が痛い。同じぼっちとして、その気持ちは俺が世界よくわかる。なぜならそれは、俺が長谷川さんに惚れた理由と同じだからだ。

「そのあとハヶ月。ずっと晴樹くんが好きでした。でも気持ちを伝える勇気はありませんでした。……どういう訳か異世界に召喚されちゃつて、一年くらい何とか無事に戦い続けていられたのも、晴樹くんのおかげでした。私、向こうにいた時はずっと思つてました。『私、現実世界に帰れたら、晴樹くんに告白するんだ……』って。そのおかげで異世界に一人ぼっちでも耐えられました」

それ清々しいまでの死亡フラグだからな。よくそれを乗り越えて帰つてこれたなあ。小鳥遊。……いや突つ込みどころはそこじゃない。

「い、一年!? む前一年もあつちにいたのか? 計算おかしくないか!?」

「カレンダーがあつたわけじゃないから、正確に一年かどうかはわかりませんけど……。あ、そうか。晴樹くんは聞いてないのかもしませんね。向こうとこつちでは時間が一致していませんから、私も晴樹くんみたいに、『向こうへ行つた直後』の時間に戻してもら

つていいんですよ。……晴樹くんも、そうですね？」

「あ、ああ……。しかし、一年か。よく耐えたなあ、小鳥遊」「過ぎてしまえばあつという間でしたけどね。でも、向こうで一年、晴樹くんへの気持ちを熟成させてきたから、戻つて告白する勇気が持てました。それに」

くすりと笑う小鳥遊は続けて言つ。

「ずっとと思い続けた人が、でももう会えないかも……なんて諦めかけていたその人が、なんと自分の飛ばされた世界に来てくれたんです。それだけじゃない。私が一年かけても終わらせることが出来なかつた戦争を、立場は違うとはいえ、たつたの一日で集結させて、結果的に私が元の世界に戻れるようにしてくれたのも、晴樹くん。あなたです」

その言葉には一片の迷いもなく、その表情には微かな躊躇いもなく、小鳥遊はまっすぐ俺を、……ちがう。俺のコンプレックスの塊であつた俺の目を見て言つ。

「これで、その人を好きにならなかつたら、それは嘘ですよ。……晴樹くん、私はもう、あなたしか見えません。あなたが、好き。大好きです」

「……ひとつ、謝ることがある」

「はい？ 謝ることって？」

全てを打ち明けてくれた小鳥遊には、俺も応えなくてはいけないだろう。

「お前が魔王からチート能力をもらつたように、俺も神様からもらつた力がある。 笑わば笑え。俺がもらつたのは『ハーレム機能』だ」

「は、はーれむ機能？ なんですかそれ？」

説明させるか小鳥遊よ。それは拷問だぞ。

「……俺、世界中の女性に嫌われると思っていたからな。だから、こっちに戻る時、神様が願いを聞いてくれるつていう言つてくれたから、迷わずこいつ返した。『長谷川佐代子さんが俺を好きになってくれるよ』って」

「あつ……」

「悲しそうな顔するな。それはダメだったんだ。向こうの神様はこっちの人間に直接関与できないんだとさ。……だから、願いを変えた。『世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のこと好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！』ってな。……つまりこれが俺の能力。無条件に女性に好かれる能力。……こんな手段を使ってでも、俺は長谷川さんと付き合いたいと思ってたんだ」

「…………」

「軽蔑するならしく。……正直に言つたが、そんな力があるものだから、小鳥遊。お前から的好意もその力のせいだと思つてた。すまん。謝る」

「…………」

「な、なあ小鳥遊。無言つて怖いんだけど……？ 怒る気持ちはよくわかる。だから何か言つてくれるとありがたいんだが……」

俺の言葉に、何やら考へ込んでた小鳥遊が、我に返つたように顔を上げる。

「あ、いえ、違つたですよ。……もちろん、怒つてないってわけじゃないで、『この鈍感男！』とか『にぶちん！』とか『朴念仁！』とか言いたくても言えない気持ちがあります」

小鳥遊。言つてゐる言つてゐる。言葉のナイフが俺に突き刺さつてゐる。

「そうじやなくて、ちょっと考へ事を……とこうか、疑問が解けたつていうか……」

「なんだそれ？ 意味わからん？ もうちょっと詳しへ」

何やら躊躇つていた小鳥遊が、やがてため息一つついてから話しだす。

「……実は、おかしいとは思つてたんです。晴樹くんが素敵な人だつていうのはよく知つてましたけど、最近の晴樹くんのモテかたはさすがにおかしいな、って」

「だからそれが俺の力なんだって」

「はい。そうです。それはわかりました。……でも、だからこそ、目立つたんです。前と態度が一切変わらなかつた人、が」

何を言い出すんだこいつ？

「クラスの全女子が晴樹くんのこと好きになっちゃつておかしな行動をとるようになつても、全く態度が変わらない人がいたんですね。なんでかなーって思つてたんですけど」

なんだそんなことか。

「そりやお前。俺の願いが『世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるようにしてくれ！』だからな。もともと俺に悪意を抱いてなかつた美鈴の態度は変わらないだろ。それに、お前が知らないだけでそういう人物、ほかにもいるぞ？ うちのかーちゃんとか吉田先生とか、な」

正直、かーちゃんの態度が『晴樹くん愛してる！』に変わつたらさすがの俺も本気で樹海行きを考えるところだった。親の愛情はあつたらしい。

俺の言葉を聞いた小鳥遊は何やらまだ迷つてゐるようだつた。

一、二度、何かを言いかけては躊躇つ、そんなことを繰り返す。

「あのな、小鳥遊。せつものでもう俺は十分傷ついたからな？ ここのことは言つてくれ

「はい。だから言つてくれ

逆に気になるから。

「……わかりました。晴樹くん、本当に鈍いんですね。ショック受けると思いますから覚悟してくださいね。……態度が変わらなかつた人、それは美鈴さんだけじゃありません。 長谷川さんも、です」

.....。

「.....は？ いやそんなことないだろ？ フラグ立つてたし。そんなことはそれを見て暴走したお前が一番知ってるだろ？」

「えっと、確かに私が嫉妬するような出来事はありました。でも、よく思い出してください。……他の人、他の女の人は、晴樹くんと何かあるとすつごい勢いで迫ってきましたよね？ 長谷川さんはどうでした？ 迫ってきましたか？」

..... 確か一回目は数学のテスト中。消しゴム落とした長谷川さんの手を勘違いして握りしめた俺に向かって、長谷川さんはいつものように優しく微笑んでくれただけな。

で、二回目。偶然スーパーで出会った長谷川さんは、俺たちに気さくに声をかけてくれて、話に乗ってくれて、いつものように優しく笑ってくれたんだよな.....。

やつ。いつものように。いつものようにーーー

「あ、あ、あ……」

「……晴樹くん。長谷川さんは最初から、晴樹くんのことを嫌つた  
りしてなかつたんですよ。……あえて、晴樹くんのことを好きだつ  
た、とは言いません。美鈴さんみたいな例もありますしね。でも、  
少なくとも嫌つてはいなかつた、これだけは確かです」

視界が暗闇に塗りつぶされる。俺の脚はもう俺自身の体を支えら  
れない。

がくりと膝をつき、俺は地面を掴む。

「な、なんてこつた……。じゃあ、じゃあ長谷川さんには通じねえ  
じゃねえか。俺の、無敵の『ハーレム機能』……」

長谷川さんの誰にでも注がれる優しさを好きになつた。

でも、その優しさがあるからこそ、俺の力は彼女には届かない。

なんて、なんて皮肉な話なんだろ？

俺は、最初から間違えていたのだ……。

誰にでも愛される力を持つているのに、本当に好きな人には  
その力が届かない俺と、そんなどうしようもないジレンマを持つ男  
を好きになつてしまつた悲しい少女。

月は優しく、そんな愚かな二人にも光を降り注ぐ……。

……どれくらい時間が経過したか、覚えていない。

やがて俺は、ゆっくりと立ち上がり、目の前の少女と向き合つ。

愚かな小鳥遊と鈍い俺は、それでもその時だけは目で通じあつた。これから先は、儀式。他の言葉に置き換えるとすれば、様式美つてやつだ。

……前と同じよつて、一、二、三度深呼吸をする小鳥遊。俺は黙つてその先を待つ。

「晴樹くん。私はあなたが好きです。もしよかつたら彼女にしてください」

それに対する俺の答えを知りつつ、でもしつかりとそつ言つてゐる

小鳥遊。

「ごめん。俺好きな人がいるからそれは出来ない。『ごめん』

前と違い、今度は誤魔化すことなくはつきりと答へる俺。

……一人の儀式はこれで終わつた。

だから、ここから先は新しい物語。

愚かな彼女は執念深かつた。異世界で一年間、孤独な戦いを

繰り広げつつも男を忘れなかつたくらいに。

鈍い男は諦めが悪かつた。たつた一人を手に入れるために全員を捕まえようとするくらいに。

「……私、諦めませんから！ いつか絶対！ 晴樹くんを振り向かせてみせますから！ そのために毎日まとわりついて頑張して頑張りますから！」

「上等だいつもかかってこいや！ しつちだつてなあ、絶対そんなのに揺らぎはしねえわ！ 僕の長谷川さんへの想いの深さを舐めんじやねえぞ」「うー！」

……うーっと唸りつつ睨みあつ一人。  
やがて、どちらからともなく噴き出す。

「お、おかしいですよね晴樹くん！ なんで『俺の事を嫌いなんなんて願い事にしちゃつたんですか！ もうー、それがなければ恋は実ったのに！』

「だつておまえ！ 仕方ねえだろ！ 言つてなかつたけどなあ、俺、子供のころからこの目つきで嫌われてたし！ そもそもお前！ お前がもうと早く告白してくれれば、『ああ、俺の事を嫌わない女性もいるんだ』って安心して、神への願い間違えずに済んだのに！」

「ええっ！ ひどい言いがかりですそれ！ それにそれじゃ私、私があんまりにも可哀そうじやないですか！ 振られる前提ですよそれ！」

「別にいいじやねえか！ 二回が三回になつても、もう大して変らねえだろ！」「ひ、ひどい！ あんまりです！ 最低です！ 大嫌いです！」

「あ、そう。じやあそういうことで」

「あああああ！ うそですうそです大好きです！ ううう…大好き

ですよつ

……無人の公園。一人のはしゃぐ声が響き渡る。  
開き直った者は、強い。だから。

「見てろよ神様。俺は絶対、長谷川さんを彼女にして見せるからー。」「見てくださいね。魔王さん。私は絶対、晴樹くんの彼女になつてみせますからー。」

俺たちは月に誓つ。  
綺麗なオリオン座が輝いていた。

「姫神テレビ。朝のニュースの時間です。まずは昨晩、スーパー『  
ニヤオン』姫神店でおきたボヤ騒ぎからです」

俺は朝飯を食いつつそのニュースを見る。……うん。やっぱり犠  
牲者怪我人0。

『不思議ではあるが、ガス漏れか何か』で片づけられそうでよかつ  
た。

「まあ、怖いわねえ。晴樹、あんたもいたんでしょ？」  
「ん。でもまあ遠くから見ただけだしな」

実は原因も解決も俺たちの仕業だけどな。かーちゃん。

「怪我がなくてよかつたわ。最近医療費も高いし、家計よつまづは俺の身を心配してくれ。」

「ありがと。……といひでかーちゃん。すまん。皿ひのびれてた。俺、今日から弁当いらねえから」

「あい? ダイヒット?」

……他人の家庭はよく知らないが、普通、年頃の息子がこんなことを言い出したら彼女の存在を疑つたりしませんかねお母様。

「ん。……まあ面倒くせこからそれでいいや。……じゃあ、行つてきます」

「あ、晴樹。本当にいいのお弁当。かーちゃんここまで見栄張らなくていいんだよー」

……氣を使つてくれてありがとうなかーちゃん。ちょっとむかつときたけど。

でも大丈夫だ。なぜならこのドアの外にはきっと

がちや。

「お、おはよひじぞいます! 晴樹くん! 今日の揚げ物はちやんとソースまみれにしてきました! 期待しててくださいね!」「だから『おみれ』にしてびつある! あれか! 早く逝けってことか!~」  
「だ、だだだだって晴樹くん、ソース好きって言つてしましましたし!」「限度があるだろう限度が! ……ああ、もういい行くぞ!~」

「ああああ、待って！　待ってください！」

『一級フラグ建築士』　VS　『隼のフラグブレイカー』

今日もその戦いはいつして始まる。でも。

「が、がんばつて作りましたから、いつしょに食べてくださいね…」

…

はにかみながらそつそつ宿敵の言葉に、早くも俺は防戦一方。

またに。これこそ。この控え田ながらも眩しく力強いこの笑顔こそ。

異世界ハーレム彼女の逆襲。その証明であった。

「ま、負けませんから！　異世界帰りの誇りにかけて！　負けませんからね！」

彼女の秘密、そして異世界ハーレム彼女の逆襲！（後書き）

次話は近日中に投稿する予定です。

なお、この作品に対する作者の見解を活動報告に載せています。  
ここまで読んで頂いた皆さんにはぜひ見て頂きたい内容ですので、  
お時間があるときで結構です。  
宜しければ」一読くださいませ。

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

## 不幸な彼女のクリスマスイヴ ～前編～

……彼女は焦っていた。時間がない。

彼女が狙う、王と呼ばれる男。王には隙がなかつた。唯一人であつても彼女の攻撃を易々と無効化する王、しかしその王に傲慢さと油断は一切存在しない。

この数日、王は自身を狙う何かの正体に気が付いているのか、常に側近を引き連れており彼女に攻撃の機会を与えない。

焦れた彼女は待ち伏せを試み、ようやく出来た王一人の瞬間に仕掛けではみたものの、その攻撃は王の鉄壁の防御によつて容易く防がれてしまう。

彼女は一流の戦士だつた。攻撃力、防御力もさることながら、その本質はサバイバーでありスナイパーである。隠密行動、そして一撃必殺こそが彼女の得意とする業であり、それゆえ、孤独な戦場において一年という長きに渡り生き延びることが出来たのだ。

その彼女が、攻めきれない。それどころか、攻撃を仕掛けることすら敵わない。

……王と呼ばれるだけあつて、自身が狙うには強大すぎる相手だ。それは初めからわかつてはいた。しかし彼女にも矜持というものがいる。あの過酷な戦場を生き延び、その後も多大なる努力を重ねてきたのは、この為。

王に一矢報いる、その瞬間の為に彼女は生きてきたのだ。

しかし、こうして王の側に忍び、はや三日。

一刻一刻と近づくタイムリミットは今日の夕刻まで。

余りにも少ない残り時間と思い、思わず強く唇を噛む彼女。

……しかし、最後の瞬間に神は彼女に微笑んだ。

常に王の側に控え、王と行動を共にする側近中の側近が、ついにその側を離れたのだ。

彼女は王に迫る。誰よりも早く。疾風のように。隼のように。そのままの二つ巴で恥じぬ速さで。

……唯一つの誤算。それは王が彼女の攻撃を予想していたこと。王は既に心構えが出来ているかのように、彼女に対し正対する。

しかし彼女は止まらない。どちらかしら時間ががないのだ。ここで終わらせなければ、もう彼女には手はない。ある意味捨て身の特攻ともいえる無謀さであった。

きやがつた！

この三日間、常に俺の隙を窺っていた奴が来た！  
おっしゃ等！ 僕も伊達に『ハーレム王』と自称している訳じゃ  
ない。こんな小動物、ここで返り討ちにしてくれるわ！

「あのー！」

「だめだー！」

「二十四日ー！」

「予定があるー！」

「ほんの少しどでいいのでー！」

「一日中『凛子愛してるよ』と呟く大事な仕事だー！」

「会つてもらつてー！」

「あと田舎のばーちゃんが危篤になる予定だー！」

「いつしょにー！」

「この明日は一人乗りなんだの 太ー！」

「クリスマスをー！」

「ごめん俺ブードゥー教徒なんだー！」

「祝いませんかああー！！！ …… 言こきりましたよおーー！ 晴樹  
くんーー！」

「てめえ小鳥遊！ 普通ここままで言われたら心折れて泣くはずだろ  
うがーー？」

どんだけ打たれ強いんだよお前はーー Mかーー？ やつぱりMな  
のかーー？

あ、いや多分すこいへこんでいる。涙目通り越して半ベソ、いや  
八割べソくらいになつてやがる。泣くぐらいなら諦めればいいのに。  
執念深い奴め

「ふ、ふん！ 晴樹くんの、そういう冷たいお返事にも慣れました  
もんね！」

「その割にはすっげー涙目だぞ小鳥遊」

「こ、これは涙じゅありませんもん！ 心の汗ですもん！」

文学的解釈では、それのことを涙つて言つたんだと思うぞ? 小鳥遊よ。

あと『もん!』つ言つた。ただでさえ見た目小学生なんだから。  
「ほ、この二日間、ずっとこれ言おうとしてたのに… 晴樹くんつ  
てばいつも美鈴さんといつしょにいるし、通学前に家で待ち伏せし  
ても、変な歴史の豆知識とかすこい勢いで一方的に話してきて隙み  
せないし…。泣きそりですよ!…」

変な豆知識つて言つた。桶狭間前の織田軍がどこに集結していた  
かなんて普通の高校生じゃ知る機会なんてないぞ? それが役に立  
つ機会もないと思つけど。

「そつは言つてもな、小鳥遊よ。この二日間のお前、獲物を狙う隼  
みたいな目して俺の事見てただろ? そら俺だつて警戒するわ」「  
……気がついてたのならせめて話くらい聞いてくれても…。も  
つと早く言つつもりだったのに、結局機会がなくてこんなギリギリ  
になつちゃいましたし…」

あのスーパー『ニヤオン』事件から二日が過ぎた。

今日は十一月二十一日。終業式の日である。今はその退屈な式典  
も終わり、解放感に包まれながらの幸せな放課後、帰宅中の通学路  
である。

意外なことに、登校時は迎えに来る小鳥遊は帰宅時はつっこな

い。

多分、美鈴に遠慮しているのではないかと思つ。正確なところは聞いた訳ではないので不明だが。ただ単に美鈴が怖いという可能性もある。あーでもどうだろ? 美鈴って俺以外には結構優しいしな……。差別反対。もっと俺を愛して。

ま、『いつしょにいない』ってだけで、ずっと物陰からついてきてはいたけど。

忍者かお前は? 存在感ないし魔法使えるし、もしかしたら天職かもな。

ちなみに美鈴さん、今は「コンビニ」にお花を摘みに行つてます。  
『濃~い。お茶』を飲み過ぎたらしい。気に入ってるのかよあれ。  
趣味悪いな。

その隙をついて突っ込んできたのがこの小鳥遊なわけなんだが……。

「…………ド、どうでしょ?」

得意の涙田+上田づかいで再度聞いてくる小鳥遊。……うーん。  
困ったなあ……。

「正直に言えば予定はない。ああないさ! なによ! とかくしょつ!」

「なんで怒るんですか……?」

そりやお前、『イヴに予定ありません』なんて悲しいこと言わせるからだよ……。ああ泣きてえ。いつも凛子連れて熱海でも行こうつ

かな？ セットのサービスあるじしいじ。

「よ、予定がないなら……」

「小鳥遊。お前の言いたいこともわかるんだがな。……そういうのは俺的にどうかと思うんだよ。……なんつーか、不誠実なんじゃねーかつて、さ」

俺はこの小鳥遊を振つていい。

『諦めない』とこいつは言つていた。その後の行動でもそれを示してくる。それはいい。有言実行で格好いいとさえ思う。たまに行き過ぎてるけど。

でも、それに俺が甘えるのは違うと思うのだ。『振つた』以上、毅然とした態度をとるのが振つた側の最低限のマナーじゃないのか？ ……こいつが、すごいいいやつだということ、それから本気で俺なんかを好きになつてくれたこと、それはよく知つている。だからこそ、俺はこいつに不誠実なことだけはしたくないのだ。

そしてもう一人。自分が惚れている女の子。長谷川さんの存在。本気で好きなんだよ長谷川さん。そのために『ハーレム』作ろうとしたくらいに。

それほど好きな女性がいるのに、その子以外の女の子と特別な日を過ごすのは、これもまた『不誠実』なんじゃないかって。

え？ だつたら長谷川さんを誘えればいいって？

……俺はまだ三日前の事件から立ち直っていないんだ。

『ハーレム機能』が通じないことは、変な行動すれば当たり前のように嫌われるってこと。そのリスクを乗り越えて長谷川さんを誘うことなど、まづちレベルカンスト、リア充レベル1の俺には、まだできない。

情けない俺を笑ってくれ。ただし、片思いの相手がいる奴はそいつに玉砕覚悟で気持ち伝えてから笑え。できるか？ なかなかできねえだろ？ なあ？

そういう訳で、イヴの俺には予定はない。そりや『ハーレム機能』があるからお誘いはいっぱいあったわ。でも、その全てを断り今に至るわけだ。

古くさいと笑わば笑え。これが山田晴樹の生きる道だ。

……いいもん。俺には凛子がいるもん……。

「……不誠実、ですか……えへへ」

なぜか俺の発言を聞いてうれしそうな笑顔を浮かべる小鳥遊？あれ？ 今の話のどこにこいつの喜びポイントがあった？

「……やつぱり、優しいです晴樹くん。……でも、そんなに気を使

つてくれなくてもいいんですよ。もつ私、吹っ切れましたし

「いやでもな。小鳥遊よ」

「いいじゃないですか。予定の無い寂しい者同士、慰め合ひついで」とだつて。友達……として会ってくれればいいんですよ。『恋愛に』

「…………うーん」

「それにどうせ、イヴに晴樹くんと一日いたりしたら、私きっと緊張で死んじゃいますし、こっしょにいても楽しませたりできませんしね……地味だし……」

そう言いつつ勝手に地味に落ち込んでいく地味小鳥遊。まさに地味。

いや。お前見ると結構飽きないぞ？ なんていうか、そう。観覧車の中で全力疾走しているハムスター見てるみたいで。うん。

「だから、十分、いえ五分でいいんです。ほんと、会ってくれるだけでいいんです。……それだけでも、ダメ、でしょ？」「？」

「…………」までも言われて断れるほど、まだ俺の心は強くなかつた。

翌日。二十二日。我が自宅にて。

ぴんぽーん。

「…………凛子、愛して……あー、はいはい。今行きますー」

がちや。

「晴樹ー。今年も来た。お裾わけ  
「おう美鈴か。さんきゅーな。ついでにお茶でも飲んだけ  
「ん。そのつもりで持参してきた。おばさんは?」  
「買い物いつてるわ。……また『濃い』お茶かよ……」  
「くせになるのこれ。おじゃましまーす」

腕に山盛りのみかんとペットボトルを抱えて現れた幼馴染。  
「いつの母方の実家が農家を営んでいるそうで、この季節には毎年お裾わけを頂く。恒例行事だし、うちの実家から送られてくるものをお返しするからこまさら遠慮はしない。

リビングに通し、二人でこたつに足を入れる。

「ふー。あつたかーい。今日はまた特に寒いねえ」  
「しらん。うちから一歩も出でないしな」  
「明日は雪かも……つて話よ。まー引き」もつの晴樹には関係ない  
か  
「大きなお世話だ。それに明日は出かける予定がある」  
「あれ? 明日発売のゲームあつたっけ?」  
そう言いつつ、ペットボトルに口をつける美鈴。

「いや。小鳥遊と約束がある」

「ふーつー！」

「おい美鈴! カーペットに染みが出来るだろ! 早く拭け!」

「げ、げほつ！　げほつ！　ひょ、ひょと待つて！　今なんて！？」

むせながらも必死に問いかけてくる美鈴。おい、いいからカーペツトを。

「なんで！？　まさか付き合つてこられたとか！？」

「おじカーペツ」

「そんなの後でぴっかぴかにしてあげるわよー　それよつざうこうことー？」

「なんでもなんす！」に勢いで迫つてくるんだよー！？　俺悪いことしたか！？

「……なりゆきだなりゆき！　付き合つたりしねえよー　確かに告白されたさ！　そんくらいお前ならわかるだろー！　でもちやんと断つた！」

「あ。やっぱりね。それは、うふ。なんとなーく気がついた」

……そこは驚かないんだな。やつぱり千里眼持つてるだろお前。

「あーびっくりした。むせかやつたじゃない。まつたく

あれ俺が悪いの？　ねえ俺が悪いの？

「でも、おかしくない？　振つたんでしょ？　なんでイガに会つ約束なんか？」

「それはむしろ俺が聞きたい。……『五分でいいから』ってせがまれてなあ

俺の返答に、何かに納得したよつぱりうん頷く美鈴。

「なるほどね。『五分』か……。それ、未練ありありよ？　氣付い

てる？』

美鈴のその言葉に返答に困る俺。そんな俺をせかすでもなく、間を持たずよつとゆつくりとお茶を口に含む美鈴。こつこつ心遣いが出来るのがこいつの美点だ。

「でもなあ。俺、ちゃんと言つたんだぜ？『好きな人がいるから『ごめん』つて。でも小鳥遊のやつ、それも知つてて」

ぶふーーっ！

「おいてめえ美鈴！ 今度は俺の顔面に向けて発射かよ！ 上等だ表でろ！」

「晴樹！ げほげほつ！ 晴樹晴樹晴樹！－！」

「なんだよ！？ いいからまずそのティッシュよこしやがれ！」

粘度の高いこのお茶が顔面についてると気持ち悪いんだよ！ 緑だし！

しかしこの失礼な女は、ティッシュを取るより先に俺の胸倉をつかむ。

「あんた！ 今なんて言つたの！？ りぴーとあふたーみー！－！」

「え？ え？ 『好きな人がいるから『ごめん』？』？」

その迫力にビビリつつさつきの発言を繰り返す。

それより美鈴！ 顔！ 顔、地下一階、違う近い近い！

「そつちじやない！ そんなの知つてる！ そのあとー！」

「『小鳥遊のやつ、それも知つてて』？』

』の発言に何の意味があるんだ？……つていうかやつぱり『俺には好きな人がいる』のは知ってるんだな美鈴よ。幼馴染つてすげーよなあ。俺はこいつの好きな奴なんて見当もつかないけど。

「……はあ。そつか。そうなのか……」

「おい美鈴。いい加減に離せ。あと自分一人でわかるな俺にも教える」

……やがて美鈴は俺の胸倉から手を離し、こたつに戻る。

「小鳥ちゃん。本気だよ。本気も本気。うん。すごいね」

「まあ……うん。それくらいは俺にもわかる」

というか命がけで思い知らされたしな。教室とかスーパーとかで。

「晴樹。あんたに好きな人がいるのは知つてた。名前は出さないけど、多分、間違つていないとと思う。そういう確信がある」

「……お前ならば、わかるだろ？ よ」

千里眼だしな。

「それは私が晴樹を生まれた時から知つてるから。幼馴染だからね」「生まれた時の記憶はないけど、まあそうだろ？」

ちなみに美鈴のほうがちょっと誕生日が早い。

「小鳥ちゃんは、私が積み上げてきた時間があるからこそ見抜いた晴樹の気持ちに、たつたの数ヶ月の付き合いで気がついたんだよね」

「…………」

正確には小鳥遊的には一年八ヶ月の付き合いだけだ。異世界分足して。

「それからもうひとつ。あなたに好きな人がいる」と。私は知つてたけど、あなたの口から聞いた訳じゃない。その答えをあんたから引き出した小鳥ちゃんはすごい」

「いやそれはほら、告白されたからであつて……」

「ウソだね。晴樹は他人に本心見せないもん。仮に誰かから告白されたとしても、その答えはきっと同じ。今は誰とも付き合つ気がない』」

……まるで見てきたかのように言つよなあ。事実を。

確かに一回田の告白の時はそう答えたよ。俺。

「恋つてすごいね。うん。すごい。私はしたことないけど、誰かを好きになるつてこんなにもすごいことなんだ。正直、驚いたよ」

「あれお前そういう経験ないのか」

俺の言葉に皮肉っぽく笑う美鈴。

「それ、晴樹が言つかなー。私にはずっと昔からあんたがいつもいたからね。男の子つて存在に近すぎたんだと思う。晴樹がいたせいで誰も寄つてこなかつたなんてことは思つてないけどさ、男女間の友情つてやつ? あれが成立する人になつちゃつたんだよねえ」

「そりや悪かつたな。でもそんなもんかねえ?」

「私もわかんない。……でもさ、恋つてやつぱり、よくわからない存在の異性とだから成立するんじゃないかなーって思うんだ。だから、ずっと晴樹といたせいで『男の子』つていうものに慣れ過ぎちゃった私は、まだ恋愛が出来ないんだと思つ。自分でよくわから

ないけどね」

そう呟く美鈴は、見たことがないような『女の子』の顔をしていて、なぜか俺はそれを直視できずつい[冗軽口]を叩いて流そうとしてしまう。

「全人口の10%は同性愛者だつて聞いたことがあるだ。全国の西岱人に謝れ」

「今私の、ここと言つたんだからセー。ちやかさないの」

「……はいよ」

……なんとなく、沈黙してしまう俺たち。ああ、別にこれが嫌つてわけじゃない。口をきかなくても、何もしていなくても気まずくならない。幼馴染つてそういうものだ。

「……うん。決めた。明日から……は学校ないから新学期からね。登下校、晴樹とするのはやめる。一人で帰ることにするよ」

唐突にやう言いだした美鈴。……おい、なんだつて?

「は、はあ? お前それって小鳥遊を応援するつてことか?」

「ううん。違うよ。……あー、うん、どうだろ? 結果的にはそうなるのかもしれないけど、別に小鳥ちゃんの味方つてわけじゃないんだよ。うん」

「意味わからん。くわしく」

「んと、なんて言つたらいいかな? ……自分でもちょっとわからないうから支離滅裂な説明になるかもだけど、いい?」

いつも快活な美鈴にしては珍しく迷った表情。無言で頷く俺。

「小鳥ちゃんの恋。それからあんたの恋。どっちも別の応援はしないよ。晴樹、そういうの嫌いだもんね。……でも、この経験は、絶対あんたのためになるよ。高一になるこの年まで晴樹見てきて、この変化は初めての事だもん」

「変化？ 僕は別にかわってなんか」

「かわったよ晴樹は。他人に初めて本心を見せた。私にさえめったに見せない本心を、今の晴樹はほんの少しだけど見せてる。小鳥ちゃん限定だけさ。これって絶対いいことだよ」

「…………」

「そうなのかな？ 僕は小鳥遊と出会ってかわってきたのだろうか？ 僕自身にはわからない」

考え込む俺に美鈴がさらに続ける。

「…………だからこれも、お節介を承知で言ひ。晴樹。ちゃんと準備してあるよね？」

「なんのだよ？」

アレのことだらうな間違いなく。うん。

「プレゼントのお返し。……『五分でいい』つてことはそういうことだよ。いくら付き合ひ気はないとは言つても、お返しは必要だと思う。例えそれが『友達として』会うんだとしても。ううん。それなら、なおさらに対等でないと」

「受け取らないって選択肢はないのかな？」

「それができる人ならさ、晴樹。そもそもイヴに会つのを断れると思つ

……想像してみる。プレゼントを抱えた小鳥遊に「いらん」という俺。

あ、だめだ。すでに小鳥遊泣いてるもん。俺絶対断れねえ。弱いなー俺。

「…………なあ、美鈴。お前今から暇だつたりしねえ？」

「暇だけどね。さすがにそれを他の女に選ばせるのはダメだと思うよ。うん」

「あー…………うん。そうだな。…………でもな、こんな経験ねーじやん? 選べとは言わない。自分で買いに行くわ。だからせめて、何かヒントくれ。じゃないと俺、何買つかわからんぞ?」

混乱した俺がペットフードとか買つてきただいす。

……まあ、それでも小鳥遊は喜びそうな気はするが……。

「…………うーん。付き合つてる訳じゃないし、重いのはダメかもね。ところがで光りものは却下。リングとかはだめってこと。だからと言つてお菓子とかで済ませるのもどうかと思う。ゲームソフトとかは論外ね。…………そんなに高くないアクセあたりが順当かなあ…………。あ、でもピアスはダメね。小鳥ちゃん、穴開けてないみたいだし」

おいちょつと全国のぼっち仲間の諸君。プレゼント選びつですげ一大変みたいだぞ? 将来、そういう相手が出来た時に苦しめ。あと爆発しろ。

「…………でも、まあ」

美鈴が優しい顔で微笑みながら囁く。

「晴樹が選んだ物なら、なんでもいいんだよきっと。晴樹がさ、小鳥ちゃんに似合うと思うものを買ってきなさい。それがきっと正解だよ。うん」

……俺はその後、このくそ寒い真冬の空の下、実に五時間かけて『小鳥遊に似合つもの』を求めたまよこ歩くことになる。

いつのいつ時、『ハーレム機能』はじつに鬱陶しい。どこの店に行つても女性の店員さんが寄つてくるからだ。アクセの店なんか、女人しかいないからな。詳細は省ぐが、もう言つてみれば『ハーレム地獄』みたいなもんだった。思い出したくもねえ。

……やつと決めた一品、それを持ち帰つた俺はそのままベッドに飛び込んだ。

似合つがどうかは責任もたん。小鳥遊が喜ぶかどうかも知らん。

でも。ま。

なんとなく、あいつは喜んでくれそう、そんな気は、した。



## 不幸な彼女のクリスマスイヴ ～前編～（後書き）

まさかの前、後編仕様に……。

まとめ能力のない作者ですいません。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

### 追記

12 / 23、累計PV 53,000 over、そしてユニーク一万  
人達成しました。

ちょっとだけ早いクリスマスプレゼント、ありがとうございました。

## 不幸な彼女のクリスマスイヴ（後編）

翌日。十一月二十四日。全国的にクリスマスイヴの日。呪われる。

小鳥遊との約束は姫神駅前に十一時。

基本的に約束は守る俺は、当然待ち合わせ時間前に起床し、まあ、なんだ。『イヴに女性といってもおかしくない』格好などをしていた。断じてオサレなんかしていないぞ？ 何しろ相手はあの小動物だし。

イヴ当日、この期に及んでもどこか腰が引けてる自覚がある自分。本当に会いに行つていいものなんだろうかねえ……。

今更のようにそんなことを考え、自分で淹れたコーヒーをすすりつつテレビを見ていると、珍しいことに自宅の電話が鳴った。うちはかーちゃんと俺の一人暮らし。当然一人とも携帯持つているので、固定電話はほとんど鳴らない。

「はい。もしもし。山田ですけどー？」

かーちゃんの声が聞こえる。そういうえばさ、固定電話だと必ず使う「もしもし」ってやつ。携帯だと誰も使わないよな。なんでだろ。何やら動搖するかーちゃん。まさか田舎のばーちゃんが倒れたとか言つんじゃないだろうな？ ないか。妖怪みたいに長生きしそうだしな、あのばーちゃん。

「は、晴樹！ あんたあて！ 小鳥遊さんって女の子からー！」

「ふーっ！」

「——ヒー吹いた。昨日からひのカーペットはお茶やら——ヒーやら大惨事だ。

いやそれはあとでいい。何してくれやがる小鳥遊！ 見るあのか一ちゃんの興味津々な眼差し！ これあとで言い訳大変だぞ！

俺は気持ち悪い笑みを浮かべるか一ちゃんから子機をひつたくる。

「おいてめえ小鳥遊！ まだ時間じゃねえだろ！ 嫌がらせか！？」

『あああ！ 『めんなさい！ 晴樹くん！ あの、その……『めんなさい！』』

ん？ なんか様子がおかしいぞ？ 声が切羽詰つてゐ。それはいつもか。

「落ち着け小鳥遊。どうした？ なにかあつたんか？」

『あの！ あの！ オ、お父さんが事故にあつたつて連絡があつて！ それで、『めんなさい！ 今日、約束してたのに、約束してたのに！ あの！』

「…………わかった。そういう事情ならしかたねーだろ気にすんな。親父さんのほうが大事だ」

『で、でも！ 私！』

「興奮すんな。約束は守る。そつち落ち着いてから会えばいいだろ？ 明日でも明後日でもこいつちはいいからさ。今は親父さんのこと考える。……親父さん、確か海外だろ？」

『ジ、ジンバブエです……』

そりやまた遠いといふか……。

「…………最悪、新学期始まつてからでもいいしな。な、小鳥遊」

『「」めんなさい……。うつづ、せつかく約束したのに……』  
「とにかく事情はわかつた。今日はキャンセルな。……じゃあさるぞ。そつちも大変だらうけどとにかく落ち着いてな」  
『は、はい……わかりました。……約束ですからね。忘れないでくださいね。……じゃあ、失礼します……』

ガチャ。ツーツーツー……。

……なんつーか、あれだよな。不幸属性だよな小鳥遊。  
親父が事故つていうのも不幸だけど、その、今日つていうのが、  
な。

…… もう。

「おひこりそー」。そこまで盗み聞きしてゐあんただあんた。かーちゃん  
「うふふ……。美鈴ちゃん以外の女の子から電話ねえ……」「  
何か勘違いしていふようだが、ただの『友達』だからな」  
「友達でもいいわよ。男友達からすら電話なんか来たことないじや  
ないあんた」

性別以前に友達そのものがいなからな！ くそつ！

「お母さん、今日は買い物で夜まで帰つてこないからね！ その、  
家に呼ぶならもう遠慮なく使つてくれていいからね！」  
「余計な気を回さなくていいわ！ もういい！ 出かけてくる！」

「あー、晴樹だ。約束、今からなの？」

マンションの外に出た途端、今度は幼馴染に捕まつた。まさかお前とか一ちゃん、結託してるんじゃないだろうな？……ありえる。

「いや。あー、……確かに毎からだつたんだけだ。キャンセルになつた」

「はあ？ なにそれぢつこいつ？ まさかあんた、小鳥ちゃんに何かひどこじとかやらしこじと前に怒らせたか泣かせたかしたんじゃ……」

「どうしてそう悪意を持つて解釈する？ 違うわ。……なんか、小鳥遊の親父さんが事故にあつたらしくってな。キャンセルというか正確には延期だ」

俺の言葉に目を丸くする美鈴。

「それは……なんというか、大変よね  
「しかも親父さんジンバブエだ」  
「ええっ！ それ年内に帰つてこれるの？」  
「どうだらうなあ……」

実際のところ俺は、ジンバブエがどこにあるかなんて知らないし。ものすごいインフレの国という知識しかない。紙幣の額面じやなく重さで取引されるとか？

「ふーん……。で、晴樹は落ち込んでる……わけじゃないわねその顔は」

ばれたか。

「あーあれか。『ほんとに今日会うていいのかなあ』なんてうづうづじ悩んでいたところにキャンセルの電話が来た……そんなとこかな？」

「千里眼持つお前に隠してもしょうがねえよな。その通り」

「持つてないわよそんなもの。……でも、ま、いいか。じゃあ晴樹、暇なのね？　せつかくだしお昼でも食べに行こう」

「…………しかし、小鳥遊さんもついてないよねえ」

「本質的に不幸なんだよあいつは。不幸属性持つてる。しかもMA Xで」

姫神商店街のはずれにあるパスタ屋。美鈴はここがお気に入りで、二人で食事をするときはいつもここを使っている。今は食後のお茶の時間。

「せつかくイヴの約束取り付けたつていうのに……相手はこんなのがいいの？ 小鳥遊さん？」

「こんなので悪かつたな。……どこがいって、そんなの本人に聞けよ。それ俺が言うことじゃねえだろ」

「仁侠映画が好きだとか？」

「チンピラ顔ですいませんでしたねえ！――」

思わず叫んでしまう俺。失礼すぎる。お冷ぶつかけてやろうか？

その声は意外と店内に響き渡ってしまい、ある人物の耳にも届い

てしまひ。

「……あー、やつぱり山田君と美鈴ちゃんだー。なにー？　なににー？　山田君、今日は美鈴ちゃんとデートなのー？　ふたまたー？」

そんな天使のような声でとんでもないことを抜かしつつ、美鈴の隣に腰掛ける俺的絶世の美少女。すなわち。

「あー。長谷川さん、偶然だねえ。『デートじゃないよ。お昼食べてるだけ』

「お、おう、そうだぞ長谷川さん。ここつとは腐れ縁だしなー！」

ちゅうとー　まさか冬休み中にも会えるなんて！　神様ありがとうー

「でも今日イヴだよー？　イヴに一人きりで食事つてどうなのやー  
美鈴ちゃん？」

「どうせなにもないの。……長谷川さんは待ち合せかなにか？  
そつちこそこれから素敵な彼氏とデートとかじゃないの？」

……神様っ！　俺はこの返答しだいでは樹海へ行くことになりそうです！

『YEH』　だつたら俺はもつ生きていけません！　むしろその彼氏とやらに向をするか自分でも分かりません！！

「ゼーんねん。お母さんと待ち合わせー。イヴと一緒に過ごす相手

なんていませんよー。美鈴ちゃん、誰か紹介してー

……俺の脳内にファンファーレが響き渡る！  
よつしゃ！ おいちょつと聞きましたか！？ 彼氏いなつて！  
いなつて！

俺が脳内パレードしている間に、長谷川さんの言葉に笑つて答える美鈴。

「紹介するくらいなら自分の彼氏にするわー。出会いないしねえ」「ま、お前はまだ色気より食い気だしなあ。美鈴」「あー、山田君失礼ー。そういうことになると、今に美鈴ちゃん誰かに取られちゃうからねえ？」  
「取られるもなにも、もともと晴樹のものじゃないしねえ私」「む？ 本当にそうなんだ？」  
「そつそ。……といひで長谷川さん、ほんとに彼氏いないの？」

よつし美鈴よく言つた。聞き出せー。聞き出すんだ真実を…  
俺はぼつちの基本スキル、『隠密』を使い聞き耳を立てる。

「いなつて！ いたライヴにお母さんといつて！ 出会つてが  
ないもの」  
「あーそつかー。長谷川さんならどんな出会つてなら惚れちやつて…」

そつねえ……そつ眩いで考え込む彼女。その仕草すら可愛くて困  
る。

「たとえばー。入学式。友達いなくて一人で不安なといひ声をか

けてくれるとか？」

「あーいいね。そつこいつができる人。……晴樹、なに変な顔してるのよ？」

「い、いや別に……」

「あとはそうだなー。遠い異国に私ただ一人。そこで偶然に再会するとか？」

「ロマンよねえそれも。……晴樹あんたどうしたの？ おなかでも痛いの？」

「あ、う、モ、気にしないでくれ……」

「ちよつと夢見ちゃうとー、私の中にある制御できない力が暴走したときに助けてくれるとか、かつてよくないかなー？」

「あはは、さすがにそれはないない。……ちょっと晴樹！ 顔色が白を通り越して土氣色！ 死にそうよあんたー？」

「う、ごめんなさい……。生きててごめんなさい……」

つまりあれか。

小鳥遊の気持ちは、成るべくしてああなつたつてことなのね……。

「わあ！ すげーーー！ まつしろだよー！」

食事を済ませ外へ出ると、モモは白い世界だった。

しんしんと降り積る雪の中、モモは赤いコートを翻してはしゃぐ長谷川さんはまるで妖精のようだ。綺麗で一枚の絵画のようだ……。

…。

「ホワイトイクリスマス……だね」  
「ああ……。俺、この光景見ただけで生きてて良かつたって思えるわ……」

神様もたまには粋なことしゃがる。うん。心からありがとう。

「話しこんでる間にずいぶん積つたみたいー！　きれいだねー！  
……つと。お母さんきたー。じゃあ一人とも、またねー！　メリー  
クリーーー！」

「はーい。またねえー長谷川さーん

「ま、またな！　転ぶなよーーー！」

ぶんぶんと元気よく手を振る長谷川さん。……ああ、来年までの天使に会えないのか……そう思つと悲しくて泣きそつだ。

「……よかつたね。晴樹」

「」の千里眼め。

「ああ……。誘ってくれてありがとな」

「」で終われば、俺にとつては幸せな、いや、切なく『ない』  
イヴだつた。

爆弾は自モリビングの留守電の中に仕掛けられていた

『一件のメッセージがあります。一十四日、十一時十五分』

『あ、山田さんのお宅でしょうか？ 小鳥遊といいます。……あの、晴樹くんへ伝言お願いします。私の勘違いでした。お父さん、無事でした。……あの、やっぱり今日会いたいので、約束の場所に待つてます。もし、時間があつたら、来てください。お願ひします』

ページ。

俺は走りにくい雪の上を全力疾走する。

静かに降り続ける雪は、いまだやむ気配を見せない。

今の時間、夕方の四時過ぎ。

美鈴と別れた俺はそのまま街を無意味にぶらつき、本屋で時間を潰し、ゲーセンで時間を潰し……帰宅して聞いた留守電のメッセージに肝を潰した。

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ げほっ！ はあ……」

四時間だ。常識で考えれば待つてるはずがないと思つ。しかし、俺は知つてゐる。小鳥遊が帰るわけはないと。

あいつは多分、俺が行くまで何時間でも駅前で待ち続ける。そういうやつだ。

だから、いると確信していたから、すぐに見つけることができた。

小柄で地味で影が薄くて、このホワイトクリスマスに浮かれた人々に埋もれてしまっていた、ぽつんと一人立ち尽くす寂しげな彼女のことを。

人波をかき分け進む俺に気がついた彼女の表情が輝く。主人を待つ忠実な飼い犬のようだ。ただただ、嬉しそうに微笑む。

「はあ……はあ……。すまん。小鳥遊。遅くなつた。すまん」  
「う……ううん。わ、私も今来たとこ、ですから……」

嘘を、嘘をつくならもう少ししまともな嘘をつけ。

俺は小さな小鳥遊の髪に積つた雪を落としつつ思う。…………髪に雪が積もるつて、お前、絶対ここから一歩も動いてないよな。

「…………せめて、その『トー』のフードを被つていれば……」  
「あ、その、私、影が薄いから、フード被つてたら見つからないかなーって……」  
「…………あほだろお前…………」

この期に及んでこいつは、俺に気を使うのだ。  
俺が見つけやすいように、と。

「親父さんは？」

「あ、あれは……その……」

「事故じゃなかつたならいいけどもあ……」「で、電話がかかってきたんです。『もしもし、俺、俺。実は事故つちゃつて大至急お金が必要なんだ。ちょっと振り込んでもらえないかな？』って。……うち、自分のこと俺つていうのお父さんしかいないし……」

「オレオレ詐欺じゃねえかそれ！ 今時そんなもんに引っかかるやついねえぞおい！」

「ジ、ジンバブエにいるはずなのに、ナンバー・ディスプレイに市街局番が出てたから、おかしいなーって思つたんですけど……」

「番号発信しているその犯人もお前も大馬鹿野郎だ！――」

俺は天を仰ぐ。

魔王よ。変な魔法を授ける前にこいつに知恵を与えてほしかったよ……。

「う、ごめんなさい晴樹くん……。心配掛けて……」

「あーもうこいいもういい。お前はそういう奴だ鳥頭め。……しかしそれならそうと、早く教えてくれればよかつたんだよ。携帯に電話するとかさあ」

俺の言葉に寂しそうに首を振る小鳥遊。

「だ、だつて知らない、ですもん。晴樹くんの番号……」

「ああそつか、教えてなかつたな。じゃあ誰かに聞くとかさあ？」

美鈴とか美鈴とかあと美鈴とか。……やべえ。クラスで俺の番号知ってるのって、実は美鈴だけなんじゃねえか？……地味に落ち込んできたぞ俺。

「それは、嫌だつたんです……。好きな人の番号、他人から聞くのが……。好きな人、じゃなくてもマナー違反ですよねそれ」

「…………」

うん。この件に関してはもういいや。平行線になりそうだ。

「そ、それに、待つてる間、いろいろ考えて学べましたし……」

「なにをだよ。駅前留学でもしてたのか？」

ジンバブエ目指して。英語圏かどうか知らんけど。

「最初の一時間は、その、晴樹くん怒つてるだろうなーとかそういうのばっかりでしたけど、一時間過ぎたあたりから、これだけ待てば許してくれるかなーって思つてちょっとホッとして、三時間過ぎたころから今度は逆に晴樹くん、なにがあつたのかなー、事故とかじゃないよなーって不安になつて……」

そこでちょっと言葉を切り、顔をあげて続ける小鳥遊。

「四時間過ぎたころ、晴樹くんが来てくれました。……すごい必死に走つて来てくれました。それから迷わず私を見つけてくれました。優しく雪を振り払つてくれました。……ああ、やっぱり私はこの人が大好きなんだ、って、会えるだけでこんなにうれしくなる人なんて、もう、晴樹くんしかいないなーって。……だから

何も言い返せない俺に、そつと大事に抱えていた紙袋を差し出す

「晴樹くん。……受け取つてもらひますか？」

……袋の中には、黒い毛糸で編みこまれたちょうど日の粗いマフラー。

黙つて受け取り、それを首に巻いてみる俺。

「……にあうか？」

「……！……はいっ！　はいっ！　とつてもかつこいです晴樹くん！　……受け取つてくれて、身につけてくれてありがとうございます！」

なんで。

プレゼントをもらつた俺よりも贈つたお前のほうがうれしそうなんだよ。

どうしたらそんなに、献身的に死ぐせるようになるんだろ？  
どれほどの想いがあれば、人はこうなれるのだろう。

こんな、俺のために。

「あ、あはは。うれしいな。すっごいうれしいです。イヴに聞に会わなくなりそうになつて時間を止めてまでがんばった甲斐がありました！」

「そんなことに魔法つかってんじゃねえよ！」

「『ごめんなさい！……ごめんなさい』で、その。あの。わ、私も、晴樹くんからプレゼントもらつても、い、いいですか？」

……珍しいなこいつがおねだりとば。

あーあれか。俺のコートのポケットも膨らんでるしな。さすがに気がつくか。

俺が答えるより早く、小鳥遊はポケットに向かって手を伸ばし……そのままその小さな手はさらに前に進み、俺の手をそつとつかむ。

氷のように冷え切ったその手。その冷たさ、それは彼女が俺を待つていた時間の長さを何よりも雄弁に語ついて。

「あ、あつたかい……。えへへ。あつたかいです。晴樹くん。……少しだけ、ほんの少しだけでいいから、こいつしていいです、か？」

俺の手を嬉しそうに両手で抱え込み、そして俺の返答を待つ小鳥遊。

「俺からのプレゼント、って、これのことなのか？」

「はい。好きな人の手の温もりですよ？ これ以上のものなんてありませんよう」

そう言つて幸せそうに微笑む小鳥遊に、俺は何と言えばいいのか。

……こつは、こうこうやつだった。ただただ俺に注がれる無償

の愛情。

その見返りに求めるものは、こんなちつぽけなもので。

言葉にできない。だから俺は行動する。開いているほうの手でポケットからその小さな小箱を取り出す。

「……それだけでいいのか。残念だ。俺も用意してきたのにな。プレゼント」

人付き合いの下手な俺はこういつ言葉しか紡ぐことができない。

ぱつと顔をあげた小鳥遊がそのきれいにラッピングされた小箱を見る。

信じられない……そう顔に書いてある。わかりやすいなお前は。

「あ、あの！　あの！　あの！！」

「いらないならしかたない。これは誰かほかの人には  
「ダメダメダメダメダメっ！　ダメです！　ください！　見せてく  
ださい！　ええっ！？　どうして手が届かないくらい高く掲げるん  
ですかいじわるです！」

「ほーらたかいたかいー」

「今の晴樹くんは知りあってから一番ひどいです！　泣きますから  
ね！　大声で！　もうわんわん泣きますからね！　人目もはばから  
ず！」

それは困るな。

だから、俺は彼女にそれを差し出す。

震える手で受け取る小鳥遊。しかしその小さな手は寒さでかじか  
んでいてリボンをほどくことすらできない。

「晴樹くん！ 晴樹くん！ 手が！ 手が震えて開けられません…」「ん？ しゃーねえなあ。ほれ」

びりつ！

「あああああああああ！ なんてことするんですか晴樹くん！  
包装紙！ 破れましたよ今！ もっと優しく！ 丁寧に！」  
「なんだよ袋なんてどうでもいいだろ。大事なのは中身であつて」  
「晴樹くんは女心をこれっぽっちもわかつていません！ 好きな人  
からもらった初めてのプレゼントなんですよ… 包装紙もリボンも  
宝物に決まってるじゃないですか！」

ああ、女ってめんぢくせえ。

しかし、本気で怒ってる小鳥遊が怖いので言つとおりに丁寧に封  
を開ける。

小鳥遊に見せたものは、シンプルな黒のチョーカー。

震える手でそれを受け取った小鳥遊が、ぽろり、ぽろりと涙を零  
す。

「お、おい……？ 不満か？ デザインが気に入らなかつたか？」  
すまん小鳥遊。お前＝子犬つてイメージでこれにしたんだがダメ  
だつたか？

ふるふる、ふるふると首を振る小鳥遊。そのたびに涙が流れ落ち  
る。

「うれしくて、うれしくて、もひ、うれしくて……。でも、どうじみつ。晴樹くん。すぐこここの素敵な贈り物をつけたいのに、涙で前が見えません……。つけられませんよつ……」

田をこする小鳥遊だが、涙は後から後から湧いてきて、一向に止まる様子がない。

「ありがとう、ありがとう」ぱこます……。「めんなさい。晴樹くんはすぐに私のマフラー使っててくれたのに、私はこんなで、ごめんなさい。ありがとう……ありがとう……」

……。

「あー、もひ、うん。だめだなこれは。やつちやいけないことだろ。

わかつてはいる。わかつてはいるのだ。これが友達にすることではないと。

でもな。

不誠実と呼ぶなら呼んでくれ。甘んじて受けれる。優柔不斷のそしりも。

そっと小鳥遊の手からチョーカーを受け取る。留め具を外す。小鳥遊の首は細くて、触れたら壊れそうで、チョーカーのオサレな長さなんか俺にわかるはずもなくて、でも俺は、不器用ながらも

彼女にそれをつけてやる。

振り払つても振り払つても、どうしても俺から離れない小さな涙  
目の捨て犬に、ついに諦めて首輪をつけるかの」とぐ。

もう、認めよう。俺はこいつを、見捨てられない。

たとえ俺に、好きな人がいたとしても、だ。

「に、にあい、ます、か？」

不安そうに不安そうに、そのチエーカーをつまみ俺に聞いてくる  
こいつを。

「あー、うん。世界首輪コンテストがあつたらお前が優勝だ」

「え？ あのそれ？ ほめてます？ あれ？」

答える代りに、俺はマフラーを外し、小鳥遊の首に巻きつける。  
顔を隠すように。俺の顔が見れないように。きっと真っ赤になる  
から俺が。

「……ああ。よくにあつてる」

「……！ あのー あのー あのーーー！」

「帰るぞ。小鳥遊。このままじゃ風邪ひくだろ？ それ巻いてけ

「あ、あの、これはあげたもので晴樹くんのもので、あれ？」

「そうだそれは俺のものだ。それ以前にお前のものは俺のものだ」「ジ、ジヤ アンですか？」

「だから早く返しに来い。新学期が始まる前に。……そうだな。俺

はこの休みはひきこもる予定だが、初詣だけは行こうと思つてゐる。

その時寒いと嫌だからな、持つて來い」

「は、はい！……え？ あのそれって

「その先を口にしたら」

慌ててマフラーを引き絞る小鳥遊。……新しい芸を覚えたな」と

つ。

話はこれまで、とばかりに背を向ける俺。……寒いんだよ。早く帰ろう。

その後ろを、俺に遅れないように必死につけてくる小動物。

「あ、あの！ ジヤあ連絡とれないと不便ですよね！？ ねつ！？」

「ほれ。携帯。赤外線ついてるから勝手に登録しろ」

「は、はい！ はい！ ありがとうございます！……あ、あの！ たまに、で、電話とかしても、いいですか？」

「用があるならな

「じゃ、じゃあ！ メールとかしきりやつても！？」

「三日一回くらいならな」

「晴樹くんのほうの携帯の私の名前登録、『彼女』にしていいですか！？」

「ふざけんな調子に乗るなそんなことしたら黙つて機種変更するわ

「つづり……。そこも流して許可して欲しかったですよ！」

「甘いわぼけ」

……雪は、まだやまない。

すかすか歩く田つきの悪い寒そうな男と、そのあとをうつこまか必死についていく薄倖そつな少女にも、優しく優しく降り続ける。

「……あ。大事なことを忘れてました。晴樹くん」

「なんだよ」

「メリークリスマス。……私に、最高のイヴを贈ってくれてありがとうございます。……私は今日のことを一生忘れません。私は、今、きっと世界で一番幸せです。絶対、絶対。……私は、晴樹くんを好きになって本当によかった。……大好き、です。晴樹くん。ずっと、これからもずっと、大好き、です」

……しぶしぶと、静かに雪は街を白へ染めていく。

田つきの悪い男の持っていた、どうしようもないほど深い、暗いコンプレックスすら、純白に塗り替えるよ。

諦めないと誓った少女の、その強い想いを、その控えめな笑

顔を、白銀に輝く光でよつ一層引き立つようだ。

……そんなことがあってもいい。だって今日は聖なる夜。  
神様だって魔王だって、優しい奇跡を起こしてくれる、そんな日  
だから。

世界中のみんなに。

Merry, Merry Christmas!

## 不幸な彼女のクリスマスイヴ ～後編～（後書き）

不幸な小鳥遊さんが、ちょっとだけ幸せになるお話をでした。

以上で今現在、私の中にあるこの物語は全て出し切りました。

ゆっくり時間をかけて、また小鳥遊さんや晴樹君、美鈴さんや長谷川さんの

これからのお話を紡ぎあげていこうと思います。

その時にまた、お付き合い頂ければ幸いです。

ありがとうございました。そして、Merry, Merry Christmas!

あなたの聖夜が、幸せなものになりますように……。

リア充でもほ言つ。

「友達とか彼女のいない奴らってかわいそうだよな。休みの日に出かける予定がないとか、すっげー暇そうだし(笑)」

……奴らは何もわかっちゃいない。

俺たちぼっちの休日がどれほど充実しているのかを。どれだけ多くのタスクを抱えているのかを。

買うだけ買って読む時間の無かつたラノベ。やる時間の無かつたゲーム。

録画してためておいたアニメ鑑賞。動画サイト検索。ニュースサイト検索。

常駐スレの警備。ネトゲでのクエスト消化。凛子にそつと愛をさせやく大事な時間。

いやもつ真面目な話、休日のぼっちのスケジュールはもはや分単位で管理されているといつても過言ではない。ちなみに俺自身はそのタスク消化のために専用のアプリを使っている。高度に洗練されたぼっちの休日とはここまで過酷なものなのだ……。

と、いうわけで。

この冬休み。俺は、それはもつしかりと引き合ひもつた。

将棋の六熊戦法の王将ですら、俺の引きこもりつぱりには負けるであろう。何しろ、『あの』一十四日以来、今日三十日に至るまでの六日間、俺は家から一步も出でていない。ここまでくるといつそ清々しいほどの引きこもりつぱりである。またそれで『寂しい』とか『つまらない』とかいう感情が全く沸いてこないのが俺のぼっちはベルの高さを表している。

多分、俺は一次元の世界、つまりゲーム画面の中に閉じ込められてもきっと困らないと思う。だから早く迎えに来ておくれ。凜子。俺は待つてゐるよ。

ちなみにこいつた長期の休みの場合、三日と開けずにうちに押しかけてくる美鈴は、何でも母方の実家に顔を出さなくてはならないことこのことで、明日三十一日まで帰つてこない。さすがの千里眼も田舎からここまでちよつかいを出すことは出来ないようだ。

そして。最大の懸念であつた『彼女』。

……小鳥遊が俺の携帯アドレスを入手したことにより、怒涛のようなメール攻撃を覚悟していたのだが、これがまた拍子抜けするくらいに全然こない。もしかしたら友達のいない小鳥遊さん、メールという機能を使つたことが無くて俺のアドレス登録に失敗したのかなど、だつたらラッキーだなあ……なーんて油断していたら、二十七日、ありえないほどの長文メールが一通だけ届いた。

その途方もない長さに度肝を抜かれた俺が、思わずパソコンに転

送した上、念入りに縦読みが仕込まれていなか探し始めたレベルの長文である。

……結局縦読みは見つからず　といつか『拝啓』で始まり『敬具』で終わるメールに縦を仕込んだとすれば小鳥遊はある意味天才だ　しぶしぶ中身を読みだした俺は、時候の挨拶から始まり、小鳥遊家の日々の献立、今年の干支に関する豆知識、ミシルちゃんの生態、そして来年の抱負から果てはユーロ圏内を襲う経済危機まで話が及ぶそのメールの意味不明さに頭を抱えた。

これほどまでに意味が分からぬメールというのは、先月知らないアドレスから届いた『主人がオオアリクイに殺されて一年が過ぎました』という件名のメール以来の事だ。……なんだつたんだろうなあ、あれは。どうでもいいけど。

……とりあえず熱意だけは感じられたので、返信をしておくことにする。

『長い。まとまりがない。読みにくい。

文章評価 1P

ストーリー評価 1P

これではお気に入り登録は無理』

……はい。送信つと

ちょっと評価が甘い氣もするが、まあ最初だし、おまけだ。

あの小鳥遊の事だから即座に涙目で返信してくるだらうし、その時に問答無用でポイントを〇に入れ直してやればいいだけの話だしな。うんう。

……しかし小鳥遊からの返信は俺の予想を大きく外し、三日後の三十日、つまり今日まで返ってきてこなかつたのである。

うつかりそんなメールの存在を忘れてネトゲのレベル上げに勤しんでいた俺は、再び小鳥遊から送られてきた、メール機能の限界に挑むかのような長文メールに驚かされる。

天災と小鳥遊メールは忘れた頃にやってくるのだ。

……またその内容といつのが『如何に山田晴樹といつ男はひどい奴か』ということが長々と述べられた見るに耐えないもので、そのあまりの極悪非道っぷりには思わず俺が俺に義憤を感じるレベル。危うく闇に葬つてやろうかと思つたもん。山田晴樹の事。俺の事だけ。

……うん。まあ、内容に関してはこの際置いといつて、だ。

なんでもまた小鳥遊は、こんな長文メールを、しかも口を開けて送つてくるのか……その理由を考えていた俺の脳裏に先日のイヴのことが甦る。

『じゃ、じゃあ…メールとかしちゃつても…?』

『三日目に一回くらくならな』

……一回田のメールが届いたのが、三日前。二十七日。

……一回田のメールが届いたのが、今日。三十日。

……。

「あのバカ……」

俺は頭を抱える。素直にも程があると言つか何と言つか……。

あの鳥頭は、律儀にも守っているのだ。

俺の言つた『三日に一回メールしていい』ルールを。

三日に一回しか送れない貴重なものだから、こんな長くなるのだろう。本来であれば一日数回やりとりすれば終わってしまうような大して意味のない話題を三日分まとめてお届けしているわけだ。  
いや、もう、ね……。

……とりあえず、正確に三日に一回、こんなトンデモ長文メールが来るのは、読んだら寿命が縮まる新聞が自宅に届けられるくらい心臓に悪いので何とかしよう。

しかし、『三日に一回』と言い出したのはそもそも俺だし、今さら『もっと頻繁にメールを送つてきてもいいんだぞ?』とか言ったら分単位で新規メールが送信されきてしがだしなあ……。

散々悩んだ挙句、俺は一通のメールを作成する。

『更新はもっと早い方がいいと思います』

『送信ひとつ。……』の意味に気がついてくれるといいんだけどな……。

…。

ま、あれだ。

長文でどれだけ文句を重ねようと、最後の最後にこう書いてしまうのが小鳥遊らしいんだけど、な。

『大晦日、会えるのを楽しみにしています』

……美鈴からの電話は、俺の大事な口課の一つである小説投稿サイト『小説家の過労!』閲覧中にかかつてきた。小説家労働組合のサイトというわけではない。念のため。

『小説家の過労!』については誰でも簡単に小説の投稿、閲覧が出来るサイトで、そのシステム上、文章というものを書き始めた中学生の妄想小説からプロ顔負けの作品まで幅広く掲載されており、見ていて飽きる事がない。

特に今日は俺の自慢のスコップが良作を掘り当て、さあ、これから一気にこの作品を読むぞと思っていた矢先の電話だったため、何

となく気勢をそがれた気分になつてしまつ。

ピッ。

『はーい。晴樹。おひさしー』

「おひー」

『あれ？ なんか機嫌悪い？ どうかしたん？』

「ん。いや実は今、面白いネット小説読んでるといふでな。要件は手短に頼む」

えー……と電話口で美鈴が不満げな声をあげている。

『せっかく電話してあげたのにそれはないんじゃないかなー』

「ばつかお前。生まれた時から毎日会ってるお前と希少な優良ネット小説、どっちのほうが優先順位が上か考えるまでもないだろ」

今こいつしてゐる間にも続きが気になつて仕方がない。

『へー。ほー。そういうこと言つんだ。……ちなみにどんな小説なのよ？』

「ん？ これがまたすげくてな。開幕早々、魔王と戦闘中の勇者がパーティーメンバーに裏切られるんだ。もつこのオープニングだけで秀逸だろ」

『あーなるほどね。うんうん。あれは面白いよね。じゃあ晴樹の時間短縮の為に教えてあげるね。あの話、実は魔王の正体が』

ピッ。ガチャ、ツーツーツー……。

一秒後に再びかかる美鈴からの電話。

『ちょっと… なんで無言で切るのよ…?』

「当たり前だこのどあほつ! お前は今、人としてやつてはいけない事をしようとしたんだぞ…! その罪、万死に値するわ…!」

なんといとしやがるこの悪魔め! ……あ、いやそれより。

「……お前も見てるの? 『小説家の過労…』」

『実は田刊一位をとった事もある』

「ちょっと待てお前。タイトルか作者名教える。感想欄荒らしきいつてやる」

『やーよ。それにうちの読者様は怖いわよ? そんないとしたらあんた、下手したらリアル割られて晒されるわよ?』

……くせう。このなつたら意地でも探し当ててポイント入れた後、ランキング集計時間直前にそのポイント消してやる……。

『何かよからぬ事を考えてるみたいだけ? ……?』

「とんでもございません」

この千里眼、どうにかならないものだらつか?

『ま、いいわ。とにかく本題ね。……明日の初詣、私たちも行くか

『はい?』

え? なに? 何を言い出した? いつ? ?

『いやだからね。明日。小鳥ちゃんと初詣行く約束してるんでしょ? それに私たちもいっしょにいくから、って話なんだけど。……あれ? もしかして小鳥ちゃんから聞いてない?』

何してくれやがる小鳥遊のやつ！ あんな俺への恨み事だけで何千文字も使うような呪いのメールする暇があるなら、そういう肝心な一言添えろよー。

『なんかねー。小鳥ちゃん。まだあんたと二人きりでいると緊張しちゃうんだってさ。だから、もしよければいつしょに行つてほしいつて。いやー、乙女だねー、かわいいねー、うらやましいねー』  
「もういいっせ、お前と小鳥遊で行くといつのまじうだらう？」「

割と名案じやないかこれ。俺、『行く年くる年』見てたいし。外寒いし。

『…………このへタレ引きもじめ』

「つづけ」

『んー。まあ、晴樹が乗り気じやないならしかたないかなあ。……ん！ わかった。やっぱり小鳥ちゃんと一人で行きなよ。こつちはこつちで一人で行くからさ』

それはそれで気が重いんだがな…………。といひで。

「お前は誰と行くん？」

…………なぜか、電話口の向こうで美鈴がにやりと笑った気がした。

『ん？ 佐代ちゃん。長谷川佐代子さん。…………いやー、あのイヴ以来、なーんか妙に仲良くなつてねえ。初詣もいっしょに行く約束してたんだけどさ。小鳥ちゃんからお願いされたから、『じゃー四人でいこー！』なんて佐代ちゃんも楽しみにしてたみたいだけねえ。晴樹にその気がないならしかたないよね。うんうん』

絶句。

「 イハ、イハ、イハ、イハ……」

『 ロケロシ ロー?』

「 イの腐れ外道がああ…… おイキサマー 何を企んでいる!?  
俺と、お前と、長谷川さんと、小鳥遊だとおお! ? お前それ俺  
の立場は! ? もうそれ針のむしろとかそういうベルジやないん  
だけど! ?」

「 んー。自業自得って言葉、知ってる?」

「 ぐつ……」

「 または、一兎を追つもの一兎も得ず、でもこいけど

「 ぐぐつ……」

美鈴の言葉に反論できず唸る俺。

だがしかし、敵は追撃をするのではなく、静かで優しげな声で言  
つてきた。

『 ……なーんてね。別に晴樹をいじめるつもりはないのよ。むしろ  
逆、かな?』

「 逆?」

『 そつね。…… あのね、こうこうことをばらすのは反則なのかもし  
れないけども、小鳥ちゃんが言つたよ。『 長谷川さんといつしょで  
も構いません。むしろうれしいです』 って。……なんで? って聞  
いたらわ、「 晴樹くんが好きになつた人の事をもっと知りたいから  
、だつてさ。つまりこれは小鳥ちゃんの願いでもあるの』

「…………」

『恋する乙女は強いて言つたど。あれ、本当だね。美鈴さんは驚いたよ。あの小鳥ちゃんにここまで言わせるとはね』

「………… 小鳥遊は、強いからな」

『うん。 そうだね。…………だから晴樹。あなたもがんばんなさい。………… 小鳥ちゃんの想いに応える、なんてお節介は言わない。でもさ、小鳥ちゃんはここまでしてるのは？ あんたもさ、あんたの好きな人の事をもつと知りうとするべきじゃないのかな？ そう言つ機会があつたら積極的に行くべきなんじゃないかな？』

「…………」

『佐代ちゃんはね、とつてもいい子だよ。でもあんたが思つてるような『天使』じゃなく、普通の女の子だよ。………… 天使には、空を飛ぶ天使には手は届かないかもしれないけどさ、自分と同じ人間なら、いつか、その想いは届くんじゃないかな？………… ごめんね、晴樹。やっぱりお節介だったかな。私』

「…………いや。すまん。ありがと」

何だからんだ言つても、ここにはいつもやつなのだ。

俺の幼馴染は、千里眼で、悪魔の頭脳を持ち、日刊一位のランカ一樣で。

そして俺に手厳しくも優しい。

「行くわ。明日。待ち合わせは何時？」

『ん。夜九時に姫神神社だからさ、八時半くらいいに迎えに行へよ。晴樹んちのマンションのエントランスで待ち合わせよつ』

「おう。わかった」

行つてやるうじやないか。美鈴の気持ちに応えるためにもな。

『OK。じゃあ切るねー。また明日ー』

「あ、おい。ちょっと待て」

『ん？ なに？』

「せめてジャンル名だけでも教えるよ。日刊一位とった奴

『あー。……そんなん決まつてるじやん』

『恋愛ジャンル、だよ』

……そういうて『まだ人を好きになつた経験がない』と言つていた我が幼馴染は、静かに電話を切つたのである。

……ついして俺、山田晴樹は美鈴たちと初詣に行くことに決めたわけである。

……この時、俺は長谷川さんに会える喜びのあまり、すっかり失念していた。

自分が持っている異能の能力のことを。無敵の『ハーレム機能』のことを。

のちに『姫神神社の乱』と呼ばれるることになるその事件が発生したのは、この年の暮れ。十一月三十一日。主犯はもちろん、山田晴樹。この俺であった……。

## 三田晴樹の華麗なる木日（後書き）

自身の中で基本構成が固まりましたので、再開しようと思こます。  
これからもどうかよろしくお願いします。

なお、今回の作中にあるネット小説、なろう様のユーザーであれば  
気づく方もいらっしゃると思いますが、モデルが存在します。

作者様にじ迷惑をかけるといけないのでタイトルとお名前は出しま  
せんが

私にとってとても思い入れの深い、素敵な作品です。

今回の掲載に関し、事前に作者様の了承を得てることを報道する  
と同時に

この場をお借りして、あらためてお礼申し上げます。  
快く快諾して頂いたこと、そして温かい励ましの言葉、ありがとうございました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

## 騒乱の大晦日

十一月三十一日。夜八時。

俺は鏡の前で身だしなみの最終確認を行う。  
前髪、よし！ ヒゲ、よし！ 服装、よし… 丼つき… よ…  
…つあつ！ 怖ええ！ おい睨むなよそこのお前！ お前だよ山田  
晴樹…！ ……はあ。

俺はため息をついて鏡の前から動く。  
もう、とりあえずは、この皿つきせどりよつもないんだし、諦  
めよう。

せめて清潔感のある服装でこよが。うん。それじよが。

「……じゃ、かーちゃん行つてくるわー」  
「あいよー。美鈴ちゃんとた・か・な・し・さんによひじへねー」  
「つるさいですよお母様。だから誤解だと言つてるのに…」  
「ま、なんだつていいわよ。いつてらつしゃいー」

俺が出かけるおかげで年末時代劇スペシャルを見るかーちゃん  
はご機嫌だった。まあ、普段は俺が独占してるとからなあ、テレビ。  
「めんなかーちゃん。

そんなことを考えつつ、俺は玄関の扉を外開きに開けた

カカカツ！！

そんな鋭い音を立てて一応鉄製であるはずのドアにナイフが突き刺さる。しかも三本。そのうちの一本は俺の前髪をかすめ、悉くつとその数本を切り落とす。

「…………は？」

人間、余りにも信じられない光景を目にすると硬直する。これ豆知識な。

油切れのロボットのようなぎこちない動きでナイフの刺さったドアと反対方向を見ると、なぜかそこには偶然とした顔のチャイナ服の少女。

そしてさりになにかの気配を感じ恐る恐るドアの影を見ると、こちらには俺をうつとりとした顔で見上げる金髪のおねーさま。

……これは、つまり、あれか。

理由は分からんがチャイナ服の少女が金髪おねーさまの命を奪う為に投げたナイフを、俺が玄関のドアを開けたことにより防いだ……ってことか。

「ア、アナタハ、イノチノオンジンデース。イッショウ、ツクシマース！ イッショニ、アンナコトヤ、コソナコト、シマシヨーウ！」  
「わ、私の投げナイフが防がれたアル。……こんなことができる凄い男には生まれて初めて会ったアル！ これは運命アル！ 私の全てをもらってくれ下さいアル！」

俺の右側からはチャイナの少女が、左側からは金髪のおねーさまが、そろいつつ擦り寄つてくる。チャイナ少女の抱きしめたら折

れそうな華奢な体と、金髪おねーさまのボリューム満点の体が俺に押し付けられる……。なにこの国際色豊かな天国。蕩けそう。

「……じゃねえ！ なにしてんだあんたたち！ 人んちの玄関挟んで殺し合ひとかマジ勘弁なんですけど！？」

「コ、コレニハ、フカイワケガ……」

「でも、あなたが言うならやめるアル。人類皆兄弟ね！」

「うるせえ！ いいからまずこのドア弁償しやがれえええ！！」

……右手にチャイナ、左手に金髪を従えた俺は、三人一緒にエレベーターに乗り込みマンシヨンのエントランスに降りる。

「うして左右に人がいると、なんつーか、自分がご隠居様にでもなった気分だ。この紋所が目に入らぬかーって。……うん。これ現実逃避な。

しかし話はこれだけでは終わらない。

エレベーターの扉が開き、俺の目に飛び込んできたもの。それは。

……自衛隊の正式装備に身を包み、エントランス全体に散開した一個小隊が構える自動小銃の銃口。なぜか、というべきか、それとも当然と言つべきか、全員女性隊員。

「女性自衛官だけの小隊。……これが噂のW.A.C.……なのか？」「すげーなおい。あの数日前の小鳥遊のボケはここに至るための複線だつたのかよ……。

「せ、世界的に有名な国際スパイ、秋麗とナターシャを同時に捕らえるなんて……」

先頭に立つ隊長格の髪の短い女性自衛官がそりそり。その目は既にピンク色。

「しかも、南雲隊長。彼、無傷です……」

「それどころか、彼、素手みたい。武器もなしにあの一人を……」「なにかしら？ あの田。まるで野生の獣のようなあの田。やだ、くらべらじやうひ……」

後ろに立てる隊員たちも口々にそりそり。もはやエントランス全体がピンク色。

くらべらじするのはいつちのほうだ。頭がだけど。……しかし、なんだこれ？

いや、わかつてない。わかつてほいろんだ。これが『ハーレム機能』の力だと云ふこと。でもさ、ちょっと、なんつーか、ねえ？

とにかく、この出でくる場所を間違えたような皆さんを相手してこては待ち合わせに遅れてしまう。俺は隙を見てチャイナと金髪から身を離し、一個小隊の中央を突破し、マンショングの出口に向かう。

よつやく外に出ることが出来た俺は、マンション正面の前に集まる多くの女性の視線をまともに浴びて硬直する。

え？ 今つて夜の八時過ぎだよな？ 何でこんなに人がいるの？

想像外のことと思考停止した俺ではあつたが、そのヤジ馬の中に、生まれたときから知っている顔を見つけ、安堵のため息とともに手を上げる。

「おーい、美鈴、二二二だ二二二……つおおおおおお…！」

なんという偶然！ 僕が上げたその手の先に、なぜか空から落ちてきた赤ん坊がしがみつく。その重さに驚きつつも反射的に全身の力で抱きしめる。赤ん坊とはいえ軽くは無い。必死に両腕に力を入れ、腰を落とす。……うつし！ 落とさずにすんだぞ！

『き、奇跡です！ 私は今、奇跡を目撃しています！ マンション3階のベランダの柵をよじ登った赤ちゃん！ その小さな命は、一人の勇敢な少年のおかげで救われました！ 姫神テレビの清水陽子が現場からお伝えいたしました！！ とりあえず放送が終わったらふたりっきりでインタビューを試みたいと思います！ ええ！ ふたりっきりで！ それはもう朝までじっくりと…！』

赤ちゃんの無事をはらはらしながら祈っていたのだらう、数多く

のヤジ馬の皆さんから割れるよつた拍手を頂く。拍手だけではなく、  
すげー色っぽい声も頂く。

「なにあの子！ すごいかっこいいんだけどーー？」

「ワイルドよね！」

「抱かれたいわ！」

「あんなすごいことをしたのに平然としているのも素敵！」

いやむしろ平然と言つより呆然としているんだが。

しかし。うん。これでわかった。つまりこのことだらう？

これは、『異世界ハーレム機能の暴走』だ……。

ざわつざわつざわ……。

俺と美鈴は前を見て歩く。というか前しか見れない。

ざわつざわ……。

一人とも無言。超真顔。ひたすら前だけを見て進む。

ざわつざわ……。

やがて見えてきた姫神神社の大鳥居。夜目にも鮮やかな朱色の柱。  
その根元にいる、ちょっと寒そうなクラスメイトに向かい、競歩

のようにならへ。

「……あ、やつときた！　おーい美鈴ちゃん？　や、山田くん？」

「晴樹くん。元気でしたか？　私は……げん……、え？　な、なんですか一体！」

「よつ……」

「はあい……佐代ちゃん小鳥ちゃん。元気だった……？」

約一週間ぶりにあつたクラスメイトと挨拶を交わすために立ち止まつた俺たち。

問題はその背後。俺たちの後ろ。小鳥遊たちが見つめるその先是。

ぞつぞつぞれ……。

「ぜんたーい！　とまれー！　いつち、こー！」

ピシッ！　ピシッ！

そのキレのいい動きを見て俺もキレる。

「なにしてんだよあんたちは……　まず国際スパイの一人！　和解したのならさつさと國へ帰れ！　それから自衛隊の皆さん！　こんなところで民間人相手に行進の指揮なんぞとる暇があるならとつと習志野でも富良野でもいいから戻つて演習してろ！　それからそれから姫神テレビのあんた！　あんたこのあと深夜一時からのスポ

一ツ番組のキャスターだろうが！　はよ局に戻れ！　番組に穴開け  
る気か！？　最後にヤジ馬の皆さん！　もう赤ちゃんは無事ですか  
ら…　何の心配も要りませんから！　ひとつと家に帰りなさい！

「――ホーム！」

一気にそう突っ込み、ぜえぜえと息を切らす俺に、美鈴がそつと  
ペットボトルを差し出す。……すまん美鈴。その心遣いは嬉しいが、  
今この状態で『濃』い。お茶のぬるりとした喉越しは自殺行為  
だ。気持だけありがたく受け取つておく。

「デモ、ワタシタチ、クニヲウラギッタコトニナルノデ……」

「もう、祖国には帰れないアルヨ……」

「うう……。

「わ、我々自衛隊は民間人の安全を守るために存在します。具体的  
には、国際スペイー一人に付きまとわれている貴方を護衛する義務が  
あります！」

「うう……。

「今日は姫神テレビは正月特番で、私、出番がないの……。部屋に  
戻つても一人だし……」

「うううう……。

「わ、私たちは別にあなたについて行つてるわけじゃないしね！」

「そ、そうそう！　大晦日だものね！　初詣に来ただけだし！」

「いやまたその理屈はおかしい。自分の格好をよく見る。誰が見つて今のあんたちは『あら? 近所で何か事件があつたみたいだわ。ちょっと見てくるわね』って格好だろ? が

そんなパジャマの上にとりあえずコートだけ着ていますみたいな恰好で、よく寒くないあんたたち。完全防寒装備の俺ですら寒くて仕方ないのに。

「……愛の力の前では、大自然の脅威なんて些細なことなのよ……」

「かつこい」と言つてますけどね、ヤジ馬のおねーさん。今あなたすっぴんパジャマでサンダル履きですからね。わかつてますか?」

そんな俺たちのやり取りを呆然と見ていた長谷川さんが、やっと口を開く。

「ねえ、美鈴ちゃん。これ、なにかなー?」

「私にもわかんない。ただ晴樹が道を歩くだけで、次から次へと女人が寄つてくるのよ……。もつ年齢問わず。下は十歳前後から上は還暦の方まで」

.....。

「……ね、ねえ山田君。愛に年の差はないっていうけどさ、しょ、小学生は、その、いろいろとまづいと思つ、よー? 青少年育成条例的な意味でー」

「まつて長谷川さん! 僕そんな趣味ないからー お願いだから誤解しないでー!」

俺マジで泣きたかった。なんなのこれ！　俺何か悪いことしたか！？

「は、晴樹くん。晴樹くん。あ、あの……」

「おう！ 小鳥遊！　お前からも長谷川さんと言つてくれ！　俺はまともだと！」

なぜかもじもじと俯きつつ眩く小鳥遊。

「わ、私、背も低いし、どうりかといえば童顔なほうだし、その、あの、ペ、ペったんこだじ。……だ、だから、私なら見た目は晴樹くんの願望満たせる上に、実は高校生だから合法？　だし？　お得だと思います……」

「てめえこの一大事になに誤解を深めるようなこと言つてやがんだ！　羽むしり取るぞこの鳥類が！　しかもほんのり頬まで染めやがつて！　それからお前は『どうりかと言えば童顔』つてレベルじゃねえ！　世界一ランドセルが似合つ女子高生だよお前は！……」

「そ、そんなに誉められると照れちゃいます……」

「誉めてねえよおおおおー！　嫌みだよそれぐらーわかれよおおおおー！」

……俺の魂の叫びが、姫神神社前に響き渡った……。

「……なるほど。『ハーレム機能』の暴走ですか……」

あれからしばらくの後。

なんとか『晴樹様と初詣に行こう』臨時募集パーティーメンバーを追い払い（しかし、一部はこの神社に潜伏し接触の機会を窺つている模様）神社の境内を歩く俺たち。

本来ならば長谷川さんの横を歩きたいところだが、まずはこの『ハーレム機能』の暴走をどうにかしたい俺は、あえて長谷川さんと美鈴からちょっと離れた後ろを、小鳥遊と一人で歩く。今はこいつに頼るしかないからな。

……目の前では一人が仲良さそうにお互いの今日の服装について話している。

ちなみに長谷川さんの今日のコーディネイトは白のふわっふわなセーターの上に赤いコート。ショートパンツ。太もものかなり上までを覆う黒のハイソックス。

そのあまりに素敵な絶対領域をまともに見たら、俺の目は失明するに違いない。

……ん？ 美鈴の服装？ そんなのどうでもいい。いつも通りだ  
きつと。

くそつ！ いいなあ美鈴のやつ……。腕なんか組んじゃつたりして……。

「何か心当たりはないんですか？」晴樹くん

「ん？いや。やはり太ももといつのは素晴らしいものだよな」

「……は？」

「あ。すまん間違えた。……心当たりなんぞなんもないぞ」

むー……と唸りつつ首を傾げる小鳥遊。

「この冬休み、特訓して能力強化を図つていたとかではないのですね？」

「特訓どころか、俺はこの一週間、家から一歩も出でないぞ？」

「家から一歩も……あ、もしかして……」

「なんだ小鳥遊。なにかわかつたのか？」

「はい。……多分、ですけど、それが原因です。……魔力というのは自然に溜まつていいくものなので、使わないでいるほどどんどん大きくなっちゃうんです。今回の場合、晴樹くんが引きこもつていたせいで発揮されなかつた『ハーレム機能』がどんどん凝縮されちゃつて……」

「……それで、今回のよつな暴走を？」

「くりと頷く小鳥遊。

なんでこいつた……。俺はもつ今後、引きこもることさえ出来ないのか……。

「でも、晴樹くん。晴樹くんはそんな力がなくともとても素敵で……。あ、忘れてました。はい。これ。どうぞ」

そう言つて自分が付けていた黒いマフラーを差し出してくる小鳥遊。

「……いいよ。お前が寒いだろそれじゃ」

「全然平気ですよ? ……だって私にはこれがありますもの」

小鳥遊は愛おしげに首に手を当てる。……正確には、その細い首に巻かれている黒いシンプルなチョーカーを。

「……これつけているだけで、私はぽっかぽかです。うそじやないですよ? 本当にこの素敵なチョーカーをつけていれば、あの田を、あのイヴを思い出して心があつたくなるんです。だから……」

「……わかったよ」

俺はマフラーを首に巻く。それを見る小鳥遊の、本当に嬉しそうな顔。

「……本当は、思つとこります。言いたい事もあります」

小鳥遊は、そっと長谷川さんを見つめつつ呟く。

「でも、やっぱり、今日、会えてうれしい、です」

……。

「……おーい、うしろのふたりー! なにしてんのさーー。のんびりしてると置いていくぞーー!」

「置いてつかやうよーー。あははーー。」

前方にいる二人が「ちらに向かい叫ぶ。  
置いていかれたらかなわない。

「いくぞ。小鳥遊」

「はい！」

……大晦日。除夜の鐘はまだ鳴り始めてない。

夜はまだまだ、これからだつた。

## 騒乱の大晦日（後書き）

本年最後の更新です。

皆さん、よいお年を！

来年が皆さんにとって素敵な一年になりますよ!!……。

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3797z/>

---

異世界ハーレム彼女の逆襲！

2011年12月31日18時48分発行